

# 沖縄県女子師範学校・沖縄県立（第一） 高等女学校における女学生の「改名」 —女学生の「個」と「同化」—

西原 彰一

総合研究大学院大学 文化科学研究科 日本歴史研究専攻

## 要 旨

沖縄県女子師範学校・沖縄県立（第一）高等女学校女学生の「改名」とは、伝統的な個人名「童名（ワラビナー）」の日本的な名「ヤマト名（ヤマトナー）」への改変をさすが、1900年代初頭に始まり、大正年間には両校女学生の間で流行したことが、教員・女学生の語り等からみてとれる。この改名は、改変の方向が「ヤマト（日本）化」である以上、沖縄の同化、統合化という文脈上に配置される事象であることは間違いない。しかしながら、改名についての個々の女学生の語りからは、同化、統合化といった「大きな物語」に回収しきれない、それぞれの「近代」への憧憬や、「自身による「名付け」＝「名乗り」としての意味などの、いわば「小さな物語」をみて取ることができる。本稿では、同窓会誌・回想録、同窓会名簿等を資料として、そこから女学生の改名についての「大きな物語」、「小さな物語」を読むことにより改名の意味するところを探り、それを通して個人の名前のあり方を視座として琉球処分・併合以後の沖縄の歴史を読むことを試みた。そのために、まず沖縄の伝統的女子個人名「童名」についての概観を行い、「童名」が個別識別機能よりも継承されることを重視した存在であったこと、また琉球処分・併合直後も、女子個人名は男子のそれと比して変化の少ない存在であったことを指摘した。ついで、女学生の「改名」の苗床となった女子中等教育の展開過程、また県女師・県立（一）高女の沿革を整理し、両校の、女子中等教育におけるトップエンド、また近代とのコンタクトゾーンとしての位置づけを明らかにした。これらを踏まえて、教員・卒業生による語り等から、当事者にとっての県女師・県立（一）高女の教育・生活の実相を、さらに、彼女らの改名に係る語りを読み込み、また『県立一高女同窓会名簿』上の改名事例の整理を行い、それらを踏まえ、1900年代初頭の沖縄での女子個人名の変化と女学生の「改名」との関連を指摘した。さらに、女学生個々の「小さな物語」としての改名を、女学校教育が囿らずも育んだ「個」の感覚において理解することで、改名が内胎した「名乗り」としての意味を指摘した。しかし、両校女学生たちは、沖縄の女子の典型では決してなく、本稿の大枠での目的：名前を視座として歴史を読むためには、出稼ぎ女工の名前の問題等へ射程を広げてゆくことが、今後大きな課題となることがより明瞭となった。

キーワード：沖縄近現代史、沖縄県女子師範学校・沖縄県立第一高等女学校、ひめゆり、女学生、改名、同化、近代化、童名、ヤマト名

---

# Renaming Schoolgirls in Okinawa Prefectural Women's Normal School and Okinawa Prefectural (First) Girls High School: Individuality and Assimilation of Schoolgirls

NISHIHARA Shoichi

Department of Japanese History,  
School of Cultural and Social Studies,  
The Graduate University for Advanced Studies, SOKENDAI

## Summary

According to the narratives of teachers and students at Okinawa Prefectural Women's Normal School and Okinawa Prefectural (First) Girls' High School, renaming of the schoolgirls, which refers to a change from a traditional individual name, referred to as *warabina* (childhood name), to a Japanese-style name, referred to as *yamatona*, began in the early 1900s and was a trend among students at both schools in the Taisho era. As the change was toward Japanization, there is no doubt that renaming was an event in the context of assimilation and incorporation of Okinawa. However, the schoolgirls' narratives about renaming imply "small stories" of their adoration of modernity and the significance of 'naming' oneself or 'claiming a name'. The small stories may not be integrated into big stories of assimilation and/or incorporation. By using materials such as alumnae magazines, memoirs, and alumnae lists for finding schoolgirls' big stories and small stories about renaming, this research aims to explore its meaning and then view the history of Okinawa after the Ryukyu Disposition and Annexation from the perspective of the state of individual names. The research provides an overview of traditional girls' names of Okinawa, *warabina* first, then points out that *warabina* was considered more important as a name to be acquired than as an individual identification functionality, and that the pace of change of girls' individual names was slower than that of boys' names immediately after the Ryukyu Disposition and Annexation. The research then discusses the development of girls' secondary education that served as a seedbed for schoolgirls' renaming and the history of the two schools, and clarifies the status of both schools as topnotch girls' secondary educational institutions and contact zones with modernity. Based on this exploration, the research uses narratives of teachers and alumnae to find the real state of education and life at the schools as well as stories about renaming. The research also organized examples of renaming on the Prefectural (First) Girls High School alumnae list to clarify, based on the findings, the relationship between the changes of girls' names in Okinawa in the early 1900s and the renaming of schoolgirls. By studying renaming as a small story of each schoolgirl in the sense of individuality, which girls' education unexpectedly fostered, the research indicates the significance of claiming a name involved in renaming. Given that students at both schools were never typical Okinawa girls, it became clearer that extending the research range to include the name issue of girls working at factories away from home will be important for the general goal of the research to view history from the perspective of names.

**Key words:** modern history of Okinawa, Okinawa Prefectural Women's Normal School and Okinawa Prefectural (First) Girls High School, Himeyuri, schoolgirl, renaming, assimilation, modernization, *warabina*, *yamatona*

## はじめに

第1章 琉球・沖縄の女子個人名、及び本稿において使用する資料について

第1節 琉球国末期から明治半ばにかけての沖縄における女子の個人名について

第2節 本稿において使用する資料について

- 1 『姫百合のかをり』 沖縄県女子師範学校 沖縄県立第一高等女学校 1936（昭和11）年
- 2 『ひめゆり』 財団法人 沖縄県女師・一高女同窓会 1987（昭和62）年
- 3 『会員名簿』 沖縄県立第一高等女学校同窓会 1933（昭和8）年

第2章 沖縄における女子中等教育の展開と沖縄県女子師範学校・沖縄県立（第一）高等女学校

第1節 沖縄における女子中等教育の展開と県女師・県立（一）高女

第2節 沖縄の女子中等教育の目的とそれを

## めぐる視角

第3章 沖縄県女師・沖縄県立（一）高女女学生、教員の語りにみる高等女学校教育、女学生生活

第1節 女学生、教員の「語り」にみる高等女学校教育と女学生生活

第2節 県女師・県立（一）高女における高等女学校教育、女学生生活をめぐる視角

第4章 当事者（教員、女学生）にとっての改名—改名をめぐる「大きな物語」と「小さな物語」

第1節 改名をめぐる「大きな物語」—女学生の改名についての時系列的展開とそれをめぐるいくつかの視角

- 1 明治年間
- 2 大正年間～昭和初期

第2節 改名をめぐる「小さな物語」—女学生の「個」と「同化」

むすびにかえて

## はじめに

1920（大正9）年12月から翌年2月にかけて南九州、奄美、沖縄本島、八重山を旅した柳田國男は、首里を訪れたおり<sup>1)</sup>「〇女学生の改名のこと」とノートに記しているという<sup>2)</sup>。柳田が、同時代の様々な事象に常に関心を向けていたことはよく知られるところだが、沖縄における女学生の改名についても書き留めていたことは興味深い。しかしながら、残されているのはこの一句のみで、他に書き添えられたコメント等はなく、柳田の著作の中にも沖縄の女学生の改名についての記述は見当たらない。

この沖縄における女学生の「改名」とは、高等女学校生徒による、伝統的な個人名「童名」：ワラビナー（沖縄名：ウシ、カメ（カミイ）、ナベ（ナビイ）等）の、日本風の「大和名」：ヤマトナ（日本名：俊子、静江、勝子等）への改変

をさすが、これまで積極的に論じられることはあまりなく、先行研究と呼べるような研究蓄積もほとんどない。

たとえば、源武雄は『那覇市史 通史編 第二巻（近代史）』（1974年）において、生活様式の変化について述べた際、「女子の風俗習慣の変化のことで、もうひとつ面白い現象が目につく。沖縄県立第一高等女学校の同窓会名簿を見ると、明治三十七年代（ママ）から大正初期にかけて女子の改名が流行したことがうかがえる。オミトを信に改めるといような改名風習の流行の様相がうかがえる。」（（ママ）西原）<sup>3)</sup>と述べ、女学生の改名を「風俗習慣の変化」、「流行」として捉えている。

太田良博は、『沖縄大百科事典』の「改姓改名運動」（1983年）において、「徴兵制、皇民化教育、同化教育などの点から不都合だとして、明治末

期から大正にかけて、とくに女学生に改名が流行し、〈童名〉以外に〈学校名〉を持ち、これが一般にも影響した。」<sup>4)</sup>と述べており、源同様に「流行」と表現しているが、女学生の改名が女子の〈なまえ〉そのものの変化の契機となったとし、また、改名を政策的な皇民化、同化という文脈からも捉えている。太田は、この同化・統合化について、その具体的施策としての風俗改良運動について述べた中で、「明治三十年代以降の、沖縄における風俗改良運動は、時代にめざめた民衆の中から自発的におこったものであったか、国策的に誘導されたものであったのか、判断しにくい。」と述べており、同化・統合化が沖縄人自身の内発的な近代化欲求を内胎するものであったこと述べている<sup>5)</sup>。しかし、波平恒男は、こうした同化志向が「下から」、あるいは「沖縄内部から」という要素を内胎していたことを認めつつも、そうした志向を生み出したのも、結局のところ、琉球処分・併合以来の政策的な同化・統合化（上からの同化・統合化）であり、内発性要素についてもその多くは、出稼ぎ等の人の移動や徴兵に伴う軍隊経験によって拡大していった、沖縄人のヤマト・ヤマト人との接触体験（被差別体験）に根ざしたものであったことを指摘する<sup>6)</sup>。

鹿野政直も、沖縄の同化・統合化に係る論考「『沖縄』と『琉球』の狭間で一戦後の出発」（1987年）において、女学生の改名について若干ではあるが触れている。鹿野は、改名についての女学生の語りを引きつつ、その方向がヤマトへ向かうものである以上「『文明』化をかかげた大正デモクラシーも、『皇民』化をかかげた昭和ファシズムも、軌を一にして姓名の「ヤマト」<sup>7)</sup>化を促進したようにみえる。」<sup>8)</sup>との見方を示している。

いわゆる琉球処分・併合以後、帝国たる日本への包摂を余儀なくされた琉球・沖縄にとって、近代化はすなわちヤマト化であり、それはいわば選択の余地のない「選択」であったといえる。

そうした認識において、鹿野、波平の指摘は重要だろう。女学生の改名についても、その改名の方向がヤマト化である以上、同化・ヤマト化という文脈において理解される事象であることは、大きな流れとしては間違いない。

しかし、女学生らの改名についての「語り」には、同化・ヤマト化という文脈だけでは回収しきれない個々の「小さな物語」を見てとることができる。これら個々の小さな物語は、当事者である女学生らにとっての改名（伝統的な童名からヤマト名への改名）とは何であったのか、彼女らにとっての改名とはいかなる行為であったのか、という問いを導くものでもある。本稿では、沖縄での女学生の改名を、大枠において（いかなれば「大きな物語」において）同化・ヤマト化という文脈上に配置される事象とした上で、これらの「女学生にとって改名とは何であったのか、いかなる行為であったのか」を「問い」とする。そして、この「問い」を初めの一手として、近現代（あるいは琉球処分・併合以後戦後に至るまでの）沖縄における女子の〈なまえ〉に係る問題を視座として沖縄の歴史を、また沖縄そのものを捉える視角を探る。

そのために、本稿では以下のような「見取り図」に沿って論考を進める。まず、琉球・沖縄における女子の伝統的個人名について概観し、その中から後の改名へと連なる視角について整理を行う。また、本稿において主に用いる三つの資料について、その概要をそれぞれの有用性と限界に注目しつつ述べる。ついで、女学生の改名の場であった沖縄の女子教育、なかんずく女子中等教育について、その特質、その目的について整理し、それらを通して沖縄県女子師範学校<sup>9)</sup>および沖縄県立（第一）高等女学校<sup>10)</sup>女学生の沖縄社会における立ち位置、すなわち沖縄社会において両校及び両校女学生とはいかなる姿をした存在であったのかを考える。さらに、両校教員、卒業生による「語り」（ここでは、書かれた「語り」となるが）を通して、彼女ら自身に

とっての両校および両校女学生の姿を探る。さらに、これらを踏まえ、「改名」そのものについての女学生、教員らの語りに注目し、それらを読み込むことを通して本稿における「問い」である「女学生にとっての改名とは何であったのか、いかなる行為であったのか」を考える。

## 第1章 琉球・沖縄の女子個人名、及び本稿において使用する資料について

本章では、まず沖縄の女子名についての基礎的な事柄を簡略にまとめ、それらの中から後の改名へとつながる視角の整理を行う。次いで、本稿で使用する主な三つの資料の概要を、それぞれの有用性と限界に注目しつつ述べる。

### 第1節 琉球国末期から明治半ばにかけての沖縄における女子の個人名について

琉球・沖縄における伝統的な個人名（以下〈なまえ〉<sup>11)</sup>）は「童名：ワラビナー」と呼ばれ、出生時に名付けられる。この童名は、成長に従って改名されるものではなく、一生を通じての〈なまえ〉である。ただし、「士（サムレー）」<sup>12)</sup> 男子の場合には元服後に、「門中」（モンチュー、ムンチュー：共通の始祖を頂く父系血縁集団）において共有する「名乗頭」（ナノリガシラ、ナヌイガシラ：〈なまえ〉における頭の一字）を頂く「名乗名」を名付けられ、童名は家族や親しい間柄でのみ用いられる〈なまえ〉となる。「百姓（ヒャクショー）」<sup>13)</sup> 男子の場合には、童名が一生を通じての唯一の〈なまえ〉である。女子の場合は、サムレー、ヒャクショーを問わず、童名が一生を通じての唯一の〈なまえ〉である。

さて、この童名について、東恩納寛惇は、『琉球人名考』（1924（大正13）年）において「上は国王より、下は田夫野人に至るまで母胎を離れると共に付けられる呼称で、且つ古へより、其の種類が一定して居て後世新造された事がないのであるから、その中には、最も古い言語を含んで居ると認むべきである。」<sup>14)</sup>と述べている。

金石を含む文献史料等を駆使したこの東恩納の論考に対して、フィールドワーク等の文化人類学的アプローチによる論考を行なったのが上野和男である。上野は、「沖縄の名前と社会—閉鎖的名前体系の一事例として—」（2002（平成14）年）において、この童名を「閉鎖的名前体系」の下にある〈なまえ〉と規定する。この「閉鎖的名前体系」とは、〈なまえ〉が命名等に際して創り出されるものではなく、あらかじめ用意された一定のストックから何らかの原理・法則に従って選び出され命名されるという〈なまえ〉体系を指す。この上野の視角は、東恩納とは異なるアプローチ、長い時間的な隔たりにもかかわらず同方向を指すものであり、非常に興味深い。さらに、上野は、この名前体系の下では、必然的に同名者が数多く生み出されることを指摘する。沖縄の場合も、名付けの多くは祖名継承（男子は父方祖父、女子は母方祖母の童名を継承するが多い<sup>15)</sup>）であり、必然的に同名者を数多く生み出すこととなり、同一の家族中に複数の同名者が存在するという場合も決して珍しくない。これについて上野は、沖縄の伝統的〈なまえ〉は個別識別機能が著しく低いか、そうした機能を求められていない存在であるとしている<sup>16)</sup>。つまり沖縄の伝統社会における〈なまえ〉は、個人を識別するための呼称というよりも、先祖から受け継がれるということそのものに重点をおかれた存在であったといえよう。このことは、琉球・沖縄の伝統的な〈なまえ〉、および〈なまえ〉システムは、近世日本的〈なまえ〉システムとも、近代的〈なまえ〉システムとも一定程度の距離のある存在であったということ<sup>17)</sup>をも意味する。これは、沖縄近現代史（あるいは琉球処分・併合以後戦後に至るまでの歴史）にあって、日本近代史的な視角の安易な援用を避ける必要があるという大きな前提に繋がる視角でもある。

さて、この琉球・沖縄の〈なまえ〉は、琉球処分・併合以降、大きな変容を余儀なくされる。

述べたように琉球・沖縄の〈なまえ〉は継承されることが前提とされる存在であり、内発的な要因による変化はほとんどない。琉球国末期の〈なまえ〉事例を見ても、ヤマト名ないしヤマト名風の〈なまえ〉<sup>18)</sup>は見当たらない<sup>19)</sup>。しかし、琉球藩廃絶・「沖縄縣」設置の翌年、1880（明治13）年に行われた「戸籍調整」は、琉球・沖縄の〈なまえ〉にとっての大きな画期となる。この戸籍調整をもって、〈なまえ〉、特に男子の〈なまえ〉は、「戸」と「戸主」を特定するための「個」を特定する重要な指標となる。1903（明治36）年の「砂糖消費税法改正之儀ニ付請願」や1900年代以降の移民名簿には、1880年の戸籍調整以前に生まれた男子の〈なまえ〉事例を見ることができるが、その中には、ヤマト名、あるいはヤマト名風〈なまえ〉<sup>20)</sup>も少なくない。1880年以前、こうした〈なまえ〉が皆無であったことから考えると、これらは戸籍調整時かそれ以後に改名されたものとみることができる。戸籍調整という名前制度にとって大きな変化が、個々の〈なまえ〉に与えた大きな影響がみて取れるのである。

しかし、こうした変化は、ほとんどの場合、男子の〈なまえ〉に限られており、明治30年代半ばまで女子の〈なまえ〉の多くは童名のままである<sup>21)</sup>。このことは、男子が戸主として個の特定を求められたのに対し、原則的には戸主となることがなかった女子の場合<sup>22)</sup>は、個の特定を求められることが少なく、同名の少ない・個別識別性の高いヤマト名をあへて名乗る必要が低かったことにもよると考えられる。こうした女子の〈なまえ〉に現れた大きな変化が女学生の改名である。つまり、女学生の改名は、男子の改名とはその目的とするところが異なるものであったとも考えられるのである。本稿が主題とする「女学生の改名」は、こうした〈なまえ〉をめぐる歴史的展開の上に配置される存在といえる。

## 第2節 本稿において使用する資料について

本稿において使用した主な資料三点について、その概要を、それぞれの有用性と限界に注目しつつ述べる。

### -1 『姫百合のかをり』 沖縄県女子師範学校 沖縄県立第一高等女学校 1936（昭和11）年

1936（昭和11）年発行。奥付がなく正確な発行日については不明であるが、巻末の「書後に」の末尾に「昭和十一年九月三十日」の日付がある。発行者は「沖縄県女子師範学校・沖縄県立第一高等女学校」、編集委員は川畑篤郎<sup>23)</sup>、仲宗根政善<sup>24)</sup>、富原初子<sup>25)</sup>、春成キミノ<sup>26)</sup>で、いずれも同校教員。四六判、縦組み、676頁。売価等の表示がなく、おそらくは関係者にのみ頒布されたものと思われる。沖縄県立図書館収蔵で原本は「特殊文庫」収蔵。本稿が資料として用いたものは「郷土資料」収蔵の複写製本版。

本書は、巻頭の校長川平朝令による序によれば、沖縄県師範学校女子講習科（県女師の前身）設置から40年、私立沖縄高女（県立高女の前身）設置から35年、県女師・県立高女の再併置から20年に当たる1935（昭和10）年を記念しての刊行とある。「前編 相思樹の巻」（女子講習科から県立一高女までの沿革）p.1～p.231、「中編 姫百合の巻」（昭和10年12月1日の創立記念式典の詳細と両校の現況）p.233～p.355、「後編 追憶の巻」（教員、卒業生の寄稿）p.357～p.643、「跋」（光本光治）、「執筆者名簿」、「本校関係者名簿」、「書後に」から構成される。本書の基本的性格は学校編集による記念誌であり、退職教員、卒業生の寄稿を数多く掲載している。しかし、その内容は多岐に渡っている。OGによる寄稿には、学校生活を離れた卒業後の生活について、なかにはヤマトにおける沖縄出身者、朝鮮人差別への憤りを記したのものや、男性優位社会における女子の生き辛さ等々に触れたものもあり、記念誌的な枠を若干超えた存在ともいえる。また、沖縄における最も初期の女子中等教育機関であ

る女子講習科卒業生や私立沖縄高女卒業生からの寄稿もあり、貴重な資料といえる。ただ、発行年が1936年であるため、当然のことながら、それ以降、県立一高女でいうなら第33回卒業生以降についての記述や寄稿はない。

## -2 『ひめゆり』 財団法人 沖縄県女師・一高女同窓会 1987（昭和62）年

1987（昭和62）年6月7日発行。発行人は「財団法人沖縄県女師・一高女同窓会 会長 源ゆき子」。菊判、縦組み、767頁。編集は、卒業生によって構成された編集委員会による。奥付けには「定価5,000円」とある。

内容の構成は以下の通り。源ゆき子による「発刊の辞」、仲宗根政善による「まえがき」、「第一部 ひめゆりの生い立ち一女師一高女・創設から終焉まで」（女子講習科設置からの沖縄戦における両校壊滅まで）p.34～p.330、「第二部 学園回想」（教職員・卒業生の寄稿）p.333～662、「第三部 同窓会沿革」p.665～p.696、「編集所感」、「年表」、「資料編」、「あとがき」。

「第二部 学園回想」は、「一 教育にかけた青春一教員一」p.333～p.381、「二 学び舎の日々一女師・一高女」p.381～p.542の二部構成。「二 学び舎の日々」は、卒業生による寄稿が中心で「（一）大正から昭和初期まで」p.381～p.412、「（二）昭和十年ごろまで」p.413～p.497、「（三）昭和十六年ごろまで」p.499～p.542、「（四）昭和二十年まで」p.543～p.662の四部構成となっている。また「資料編」には、『昭和十五年度沖縄県女子師範学校 沖縄県立第一高等女学校 沖縄県学校衛生婦養成所 一覧』が翻刻収録されている。

この『ひめゆり』は、前掲『姫百合のかをり』の続編ともいえる存在だが、第一部では『姫百合のかをり』からの引用も多い。また、かなり大掛かりな卒業生アンケートが行われたことが、巻末の「編集所感一私たちは急いでいた一」において述べられている。「三三名の先生方がアン

ケートに答えてくださった。どれも当時の若々しさをほうふつとさせるお答えであった。同窓生の回答は、それぞれ時代を偲ぶユニークな資料として大いに参考になった。昭和五十九（一九八四）年五月十日現在で回答者は七六六名、明治四十一（一九〇八）年入学から昭和一九（一九四四）年入学まで、三十七期に亘っている。」<sup>27)</sup>とあるが、締め切り後に到着した回答が多かったこと、各卒業回毎に回答数にばらつきがあること等により、アンケート自体をまとめて公表することを行わなかったとしており、その点は惜しまれる。記事内容は、執筆者の年齢の高さもあり、より同窓会誌的傾向が強い。その傾向はむしろ『姫百合のかをり』よりも強いともいえる。しかし、丹念に読み込むことで得られる情報は少なくはない。

## -3 『会員名簿』 沖縄県立第一高等女学校同窓会 1933（昭和8）年

1933（昭和8）年5月30日発行。以下『県立一高女同窓会名簿』または『同窓会名簿』。「編集兼発行人」は春成キミノ、「発行所」は「沖縄県立第一高等女学校同窓会」。「非売品」。判型は12cm×17cmの横綴じ、縦組み、180頁。ただし、本稿において利用したのは、比嘉春潮文庫マイクロフィルム複製版で判型は拡大された19cm×26cmの横綴じ。内容は、同窓会名による挨拶、「沖縄県立第一高等女学校 同窓会会則（明治四十二年制定昭和二年八月十六日改正）」、「客員」（教員を含む学校職員を指す）の名簿p.1～p.12、「会員（年度別）」p.13～p.110、「地方別」：現住所別に姓名のみを列記 p.111～p.132、「沖縄県立第一高等女学校同窓会家政実習所」：同所卒業生24名の「姓名」、「現住所」、「索引」p.135～p.180、「正誤表」によって構成される。

収録されているのは、1904（明治37）年第1回卒業生から1933（昭和8）年第30回卒業生までの同窓会「会員」2,316名の「姓名」、「旧姓名」、「現住所及勤務先」<sup>28)</sup>である。現姓名と旧姓名

の掲示は「索引」でも行われている。各卒業回の末尾には、会員名簿編集時の「故会員」がまとめられているが、姓名のみ表示<sup>29)</sup>。また、教員については、旧教員195名（うち校長は10名）、現教員41名の姓名、名簿編集時の住所が収録されている。県女師および県立高女は1927（昭和2）年以降、それぞれの校友会組織を統合、「姫百合会」として一本化されるが、この『同窓会名簿』は、あくまで県立一高女同窓会のものであり、収録されているのも県立高女および県立一高女の卒業生のみである。

この『同窓会名簿』を資料として女学生の改名を考える場合、二点の留意すべき問題がある。まず第一には、生徒の出身についてである。のちに触れるように県女師・県立（第一）高女には、設立当初から一定数以上のヤマト出身者が在籍した。本稿の主題である「女学生の改名」とは、沖縄名・童名からヤマト名への改名であり、自明ながらその対象は沖縄出身の女学生となる。そのため、基礎的な作業として名簿上の卒業生を沖縄出身者、ヤマト出身者に分ける必要が生じ、それを行なった。この仕分け作業の基準となったのは、第一には各生徒の名字である。まず金城、知念、仲村渠等の特徴的な沖縄姓を「姓名」、「旧姓名」に表示している者を、沖縄出身者として仕分けした。しかし、沖縄で名乗られる名字には、山田、川上、岸本等々、ヤマトと共通するものも少なからず存在する。そうした場合には沖縄名・童名：ウシ、マウシ、チル、カミイ等を名乗っているかどうか、あるいは旧名として名乗っていたかどうかによって仕分けを行う。さらに、「同窓会名簿」には、ヤマト名のみを名乗る沖縄出身者も少なくない。沖縄特有の姓（苗字）にヤマト名の組み合わせであれば、沖縄出身者として仕分けすることができるが、その姓が沖縄姓かヤマト姓か判然としない場合には、その姓（苗字）が地名として沖縄に存在するかどうか（比嘉春潮によれば、沖縄の姓（苗字）は、屋号に由来する少数の例外を除き、ほとん

どが地名に由来するという<sup>30)</sup>）、さらに『沖縄県姓氏家系大辞典』沖縄県姓氏家系大辞典編纂委員会 角川書店 1992を用いて判断した。こうした仕分けの結果、卒業生2,316名のうち沖縄出身と考えられる者は1,896名となった。しかしながら、判断に迷う事例も少なくなく、取りこぼしの可能性は否めない。精度の向上については、継続的な課題としたい。

第二の問題は、改名が行われた時期特定の問題である。述べたように、『県立一高女同窓会名簿』には、「姓名」、「旧姓名」が表示されている。そのうち「旧名」を表示している者、つまりなんらかの事由により〈なまえ〉を変えた者は、卒業生2,316名（うち沖縄出身者は1,896名）中148例にのぼる。源武雄が指摘する同窓会名簿に見られる改名とは、この旧名の表示を指すと考えてよいだろう。女学校の同窓会名簿に「旧姓」が併記されるのは珍しいことではないが、「旧名」が記載されることはあまり例がなく、148例は他に例を見ない。単純な比較は危険だが、東京府立第一高等女学校卒業生名簿に見られる改名事例数は、第1回から第27回までの卒業生1,564名中わずか4例にすぎない<sup>31)</sup>。この点から考えても、女学生の改名は、沖縄において特徴的に見られた事象であったと考えて差し支えないだろう。

しかし、これら、同窓会名簿上の「改名」は、在学中の改名を示すものではないと考えられる。例えば、県立高女第8回（1911（明治44）年）卒業生の宮城文<sup>32)</sup>は、同郷の級友豊川敏、新嘉喜操らと共に在学中に改名を行なったことを述べている<sup>33)</sup>が、『同窓会名簿』には三人とも改名後のヤマト名のみを記載し、旧名の童名を記載していない。そもそも『同窓会名簿』に旧姓・旧名の記載があるのは、卒業後の改姓・改名に対応するためであり、在学中に改名を行なっているのであれば、それは周囲に周知された〈なまえ〉であり記載する必要はないといえる。「索引」においても現姓名、旧姓名が記載されていることからそれはいえるだろう。したがって、



この『同窓会名簿』上の「姓名」は1933年時点の「姓名」であり、「旧姓名」にみられる改名事例は卒業後のいずれかの時期に行われた改名によるものと考えられるが、その時期を特定することは難しい。職業、現住所等についても同様である。30年間2,316名に及ぶ高女卒業生の名前、職業、現住所等データについても、あくまで1933年時点でのデータであり、注意を要する。本稿では、こうした『県立一高女同窓会名簿』の資料的な限界を踏まえた上で読み込みを行った。

## 第2章 沖縄における女子中等教育の展開と沖縄県女子師範学校・沖縄県立（第一）高等女学校

本章では、改名の当事者であった県女師・県立（一）高女女学生たちが、沖縄における女子中等教育において、また沖縄社会にあってどのような立ち位置を占めた存在であったのかを考える。そのため、まず沖縄における女子教育の展開過程に即して両校の沿革を整理し、ついで、女子中等教育が目的としたところを、また彼女ら女学生の沖縄社会での立ち位置、言い換えるなら彼女らが求められた「姿」に着目し、それらをめぐる視角についての整理を行ってゆく。

### 第1節 沖縄における女子中等教育の展開と県女師・県立（一）高女

「旧慣温存政策」に象徴される、比較的緩慢な明治政府の沖縄政策にあって、教育政策は戸籍政策<sup>34)</sup>とともに例外的に素早い動きを見せた。そこには新領土としての沖縄に対する、教育による「同化」、「言語風俗」の「同一」化を推進しようとする意図が明瞭に見て取れると見てよいだろう<sup>35)</sup>。

こうした意図を反映し、新学制が実施された1880（明治13）年には、沖縄県庁により通訳及び「普通語」（日本語）を使用できる小学校教員の養成を目的とした「会話伝習所」が設置される。しかし、この会話伝習所は同年6月には廃止され、

変わって「沖縄師範学校」が設置され、その目的とするところは教員、すなわち「言語風俗」の「同一」化の担い手の養成へと、より明確なものとなる。

しかし、新学制は沖縄人には歓迎されず就学率は低迷する。この就学率低迷は、士（サムレー）層にとっては、琉球処分・併合に対する反発や明治政府や新体制そのもの、また「近代」的な教育内容に対する忌避感によるものと考えられるが、就学率は百姓（ヒャクショー、平民）層においても低迷する。これは、百姓層の「学校教育」に対する欲求の低さによるものといわれるが、そもそも近世琉球国の百姓層にとって、家内における生活技術の伝授以外の「教育」はかなり縁遠い存在であったという<sup>36)</sup>。さらに近藤健一郎によれば、「小学校」はしばしば「ヤマトヤー」（大和屋）と呼ばれ、よく理解できないヤマトグチ（日本語）を操る高圧的なヤマト出身教員の振る舞いと相まって、威圧感と恐怖をおぼえる存在であったという<sup>37)</sup>。

女子にとっての「学校教育」は、士層、百姓層ともに、男子以上に縁遠い存在であった。女子に対する伝統的教育も実用的生活技術、例えば家事、機織り等の手工技術、行商等の小規模な商取引について必要とされる計算技術等<sup>38)</sup>が家内で伝授されるのみであり、特に「教育機関での教育」からは遠ざけられた存在<sup>39)</sup>であったといわれる<sup>40)</sup>。そのため、上層士族、王族の女子であっても識字能力を身につけた者は決して多くなかったという<sup>41)</sup>。

こうした状況のもと、明治政府による女子教育は、男子に遅れること7年、1887（明治20）年女子の小学校入学許可に始まる。しかし、女子の就学そのものへの忌避感、反発は小さくなく、その就学率も非常に低かった。そうした状況の下、1896（明治29）年には沖縄県尋常師範学校に「女子講習科」が設置されるが、これが沖縄における女子中等教育の嚆矢となる。この女子講習科は、二年過程の小学校女子教諭育成機関

であり、沖縄県女子師範学校の前身にあたり、低迷する女子就学率向上のため女子教員の増員を図る意図のもと設置された。

この女子講習科設置の4年後、1900（明治33）年「私立沖縄高等女学校」が設立される。これは全国各道府県に高等女学校設置を義務付けた1899（明治32）年の「高等女学校令」（明治三二年勅令第四二四号）への対応であり、「私立」とはいうものの「官立」的な色彩が強く、校舎も師範学校女子講習科と同じ県尋常沖縄師範学校敷地内に設置された。この私立沖縄高女は、3年後の1903（明治36）年には県に移管され「沖縄県立高等女学校」となり、1907（明治40）年には那覇市郊外真和志村に建設された新校舎へ移転する。

一方、師範学校女子講習科は、1910（明治43）年には沖縄県師範学校女子部、ついで1915（大正4）年には沖縄県女子師範学校（県女師）として独立することとなるが、校舎は依然として師範学校内に置かれたままであった。しかし、男子の師範学校内に女子師範学校がおかれることの是非、校舎の物理的な狭さ<sup>42)</sup>、運営費用の問題<sup>43)</sup>等により、1916（大正5）年には真和志村の県立高女敷地内へ移転。両校は再び並置され、校長についても県女師・県立高女兼任となる。この県女師の県立高女敷地内への移転について同窓会記念誌『姫百合のかをり』には、「両校の合併」<sup>44)</sup>と記されているが、以後、徽章デザインの共通化（1921（大正10）年）、両校校友会の「姫百合会」<sup>45)</sup>としての一本化（1927（昭和2）年）等合同化が進む。この両校合同の状態は1945（昭和20）年6月の沖縄戦における両校の壊滅まで維持され、さらに戦後も両校同窓会は「財団法人ひめゆり同窓会」として両校の卒業生を会員として運営されている<sup>46)</sup>。

さて、沖縄における女子教育が強い忌避感情を持って迎えられたことは述べた通りだが、女子講習科第一回（1896（明治29）年）入学生中、唯一の沖縄人であった安村（久場）ツルは、『姫

百合のかをり』に当時の状況についての回想を寄せている。そこには、政策的な入学督励の行われたこともうかがえる。

世間の人々は私たちに向つて「女のくせに学校に出て一体大きくなったら何になるんだらう」と嘲笑してゐました。当時は官吏の子供だけ学校に出てゐました。私も父が郵便局長をして居ましたので薦められて入学したのです。学校の往復は学校に行かなかった風を装い本を懐に隠して通学しました。読書するにも隣り近所から聞こえないやうにと黙読したものです。<sup>47)</sup>

また第二回入学生の武富ツル（節子）も、「教員講習所に入所するときは、親類縁者みな反対でありました。」と述べ、続けて語る。

女子の教育機関としては高等小学校でさへ全県下で五指を折るに過ぎない程で、其の上の学校としては女教員の速成養成所として、唯一つ師範学校内に女子講習科といつて、修業年限二ケ年の尋常小学校準教員養成所があるだけでありました。それで特に教員志望でなくとも女の子を一人他府県に出すのも容易の事でないからと言ふので他県から来られた方の中には講習科に入れた家庭もありました。<sup>48)</sup>

ここで興味深いのは、女子の中等教育に対する見方について、沖縄人と他府県人の間には温度差がうかがえることである。官吏や寄留商人である在沖ヤマト人たちは、この時期すでに子女に対する中等教育の必要を感じ、高等女学校の代替教育機関として女子講習科を選んでいたのである。

こうした女子中等教育をめぐる状況は、沖縄高女の設立（1900（明治33）年）に至ってもあまり変わらなかつたらしい。富原（比嘉）初子（マ

ウシ）（県立高女第2回（1905（明治28）年）卒業生）<sup>49)</sup>は語る。

さて入学は致しはしたもの、祝つてもらふなどの段ではなく、入学したことをひたかくしにかくし、世間の人には勿論、親戚の者にも知られないやうに致しました。いつぞや道で「あんな首里の学校なんかに入つてはいけませんよ」と親戚の者に云はれた時も、「はいりませんとも」とツイ答へてしまひました。<sup>50)</sup>

しかし、こうした女子中等教育をめぐる状況は、この後数年で大きく転回する。具志堅（安元）光（一高女第10回（1913（大正2）年）卒業生）は語る。

私共より数年前に入学された方々は、世の毀誉褒貶と戦ふ為めずるぶん、苦心をなさつた様に伺ひましたが、明治も四十年を過ぎる頃からは、別段に珍づらしい事では有りませんでした。<sup>51)</sup>

下表「表1 沖縄県立一高女の入学志願者と入学者」は沖縄高女、県立高女の入学志願者、合格者の推移を見たものだが、1902（明治35）年、1905（明治38）年に志願者が急増したことがわかる。

この時期（明治30年代）の沖縄、すなわち日清戦争後の沖縄では、士（サムレー）層を中心とした反ヤマト親清国派が清国の敗北により大

きく退潮した時期であり、それと同時にヤマトや新体制への忌避感情が後退し、近代化への希求が高まった時期であるといわれる。また、この時期は就学督励が強化された時期でもあり<sup>52)</sup>、沖縄における教育状況自体に変化がみられた時期でもあったという。

県女師・県立高女以外の女子中等教育機関の沿革については「図1 沖縄における女子中等教育機関（女師・一高女を除く）1900（1897）～1944」に示した。1900年の私立沖縄高女設立と同時に首里区立女子実業補習学校が首里尋常高等小学校女子補習科<sup>53)</sup>を母体として設立され、また私立沖縄高女の県立への移管と同時に首里区立女子工芸学校として区立へ移管されているのは興味深い。

## 第2節 沖縄の女子中等教育の目的とそれをめぐる視角

こうした沖縄における女子教育、なかんずく女子中等教育は、いかなる目的を持っていたのか、いかなる女子を育てようとしていたのだろうか。明治政府による女子中等教育そのものの主たる目的は、文部大臣樺山資紀による1899（明治32）年の訓示<sup>54)</sup>に端的に示されるように、中産階級家庭の主宰者たる「賢母良妻」の育成にあったとって差し支えないだろう。この「賢母良妻」（良妻賢母）思想は、小山静子によれば、近世以来の儒教的な女性観にのみ収斂されるものではなく、「国家の一員としての女性の育成」を強く意識した教育目標であり、近代国民国家建設という目的を見据えた教育目標であった事が

表1 沖縄県立一高女の入学志願者と入学者

	1900/ m33	1901/ m34	1902/ m35	1903/ m36	1904/ m37	1905/ m38	1906/ m39	1935/ s10	1938/ s13	1939/ s14	1940/ s15
入学志願者	25	29	50	107	159	230	180	313	338	390	482
入学者	20	18	34	37	45	83	88	155	158	171	162

『姫百合のかほり』1936および『昭和十五年度 沖縄県女子師範学校 沖縄県立第一高等女学校 沖縄県学校衛生婦養成所 一覧』より

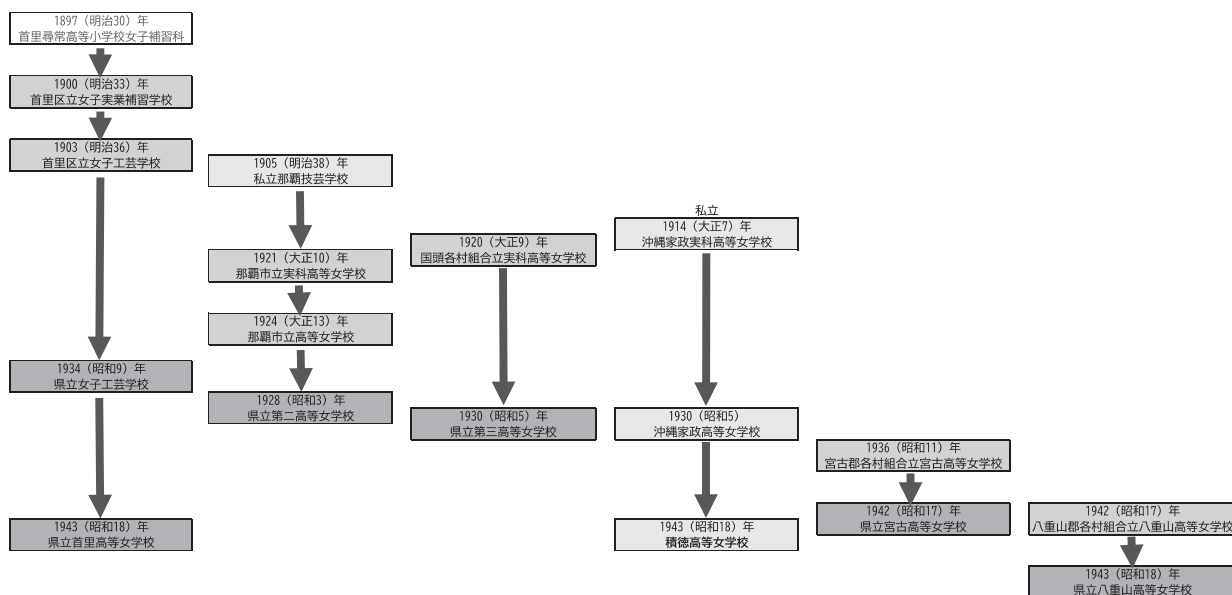


図1 沖縄における女子中等教育機関（女師・一高女を除く） 1900（1897）～1944

指摘されている<sup>55)</sup>。こうした教育目標は、近代国民国家たる日本への包摂という「世がわり」のまっただ中にあった沖縄にあって、いかに展開されたのか。また、それは沖縄人、沖縄社会においていかに捉えられたのだろうか。

1900（明治33）年、私立沖縄高女開校式における太田朝敷の祝辞は、この女子中等教育の目指すべきところ、また女学生たちに求められた役割を端的に示している。「くしゃみをする事まで他府県の通りにすることであります」との一節で知られるこの式辞だが、その前段において式辞の主題として説かれたのは、家庭における「文明」の重要性であり、その「文明」の担い手としての女性の役割であり、さらには、その担い手を育成する女子教育の重要性であった。

女子教育と文明とは至大の関係を有して居る者であります。一中略一文明の光も、家庭より発する者でなければ真正の光ではありません。而して女子は家庭の主宰でありますから、女子の手でなければ決して純良の家庭を造ることは出来ませぬ。されば光輝ある家庭を造らむとするには、先ず純

良の婦人を作るのが唯一の方法でございます。純良の婦人を作るは女子教育を盛ならしむるの外に道はありませぬ。<sup>56)</sup>

女学生たちは、将来の家庭の主宰者/教育者、女性教員として「文明」化の担い手たることを求められる存在であり、他府県の「くしゃみ」とは、可視化された「文明化」の隠喩に他ならない。そして、それは同時に「脱沖縄化」、「他府県並化」なのである。国民国家の中核的構成単位である家庭の主宰者たることを求められると同時に、「おくれた」、「文明的」ではない沖縄の文明化を、女性や家庭という次元において担うことを求められたのである。

さらに、太田良博<sup>57)</sup>、儀間園子<sup>58)</sup>らは、「風俗改良」が女子風俗そのものを「標的」とする傾向を強く持ち、それゆえ女子教育が注目されたことを指摘する。「風俗が乱れるのは、女子の徳操がしっかり養われていないからだ<sup>59)</sup>」とする論理であり、それゆえ、ことさらに女子風俗は「改良」の標的とされ、卒業生、女性教員がその「改良」の最前線での担い手とされたのである。武富ツルは、『姫百合のかをり』において「私共

が二年生の時、「先生になるのだから、琉装も本島の風土に適した服装ではあるが和装に改めては」とのご相談にあずかった<sup>60)</sup>と述べている。琉装から和装への変更の論理が、琉装の合理性を認めつつもなお、「先生になるのだから」という事由を持って語られるのは象徴的といえるだろう。また、小橋川カナ（県立高女第12回1915（大正4）年卒業）は「女教師は学校の授業だけでなく、学校区域の人々の生活を指導する役目もあった。母親教室に参加して生活改善や衛生指導の普及、しつけなどの講義をしなければならぬ。」<sup>61)</sup>と述べており、こうした女性教員の立ち位置、役割は大正年間においても依然続いていたことがうかがえる。

さらに、女学生、卒業生、女子教員への「文明化」の担い手としての要求は、やや異なる方向からの要求にも同期することになる。伊藤るりは、沖縄における女子中等教育を「男性（男子教育）以上に加速的で凝縮された過程」（○内は西原）であり、単に明治政府による政策としてだけでなく「沖縄の男性知識人自身がこの過程の促進を積極的に沖縄内部から支持したことによってももたらされた」<sup>62)</sup>ものでもあったとする。「賢母良妻」は、日清戦争後、近代化/ヤマト化へ転轍した（あるいは転轍せざるを得なかった）沖縄において、文明・近代を自身へ取り込みキャッチアップをはかる新世代男性知識人らが求めていたところとも合致するものだったのである。伊波普猷の「教育ある妻を与えよ」「沖縄において何よりも急務なのは、言語・風俗・習慣を日本化させることだ。否女子教育をもっと盛んにして家庭の改良を計ることだ。」<sup>63)</sup>との言は、そうした男性知識人の求めたところを象徴するものといえるだろう。

沖縄の女学生たちは、国民国家たる「日本」の中核的構成要素である「中流階級家庭」の構築・運営を担い、同時に沖縄の「文明化」＝「風俗改良」の先兵たることを求められ、さらには新世代男性知識人の「文明化」された「お世話係

たることをも求められたのである。まさに「加速的で凝縮された過程」を疾走することを強いられた存在であったといえるだろう。

### 第3章 沖縄県女師・沖縄県立（一）高女女学生、教員の語りにみる高等女学校教育、女学生生活

本章では、前章において整理を行った沖縄における女子中等教育の展開過程、またそれについての視角を踏まえ、沖縄県女師・沖縄県立（一）高女の教員や女学生の語りから、両校における教育、また女学生生活を読み込んでゆく。ついで、それらを通し女子中等教育における県女師・県立（一）高女に係る視角についての整理を行う。

#### 第1節 女学生、教員の「語り」にみる高等女学校教育と女学生生活

当初、強い忌避感をもって迎えられた沖縄の女子中等教育であったが、第2章第1節の「表1 沖縄県立一高女の入学志願者と入学者」に見られるように、明治30年代半ば以降には入学志願者が急増、同時にその入試競争率も上昇する。こうした状況は、県立高女のみならず、女師においても同様か、それ以上であり、両校女学生の沖縄女子中等教育におけるトップエリートとしての高い自意識の醸成へと繋がってゆく。

小橋川カナ 1897（明治30）年 那覇下泉町 県立高女

明治四十四年四月、沖縄県立高等女学校に入学した。県立でたった一つの女学校で、県下では女の最高学府の学校とされていた。<sup>64)</sup>

島マス 1900（明治33）年生 美里村字伊波 県女子師範

私は沖縄県女子師範学校を受験、難関を突破して合格した。女子師範は教師の養成学校で、県下から入学を許されていたのはたった四十八人。美里村からは四人の先輩

が行っていたが、四人といえども中頭地区では一番の進学率だった。<sup>65)</sup>

野崎(安里)文子 1906(明治39)年生 首里池端町 県立一高女

良妻賢母を合言葉に、教育方針が貫かれていた県立第一高女へ、私が入学したのは大正八年である。沖縄の学習院といわれた同校は、女子のしつけが徹底し、当時の乙女たちのせん望の的であった。上級生になると服装はもちろん、ツマ先から頭のとっぺんまで統一され、エビ茶のはかまに革の靴。また、上半身はそでの長い着物にヒサシ髪を装った。修身教育華やかなりしころで、廊下ですれ違う先生方には深々とお辞儀をしたものである。

私の一高女入学時をふり返ってみると、あのころの一高女は一学年の定員が百人で、県下各地から志願者が殺到、狭き門だった。私の女子部小校(沖縄県師範学校女子部小学校)からも約十五人が進学を希望、うち六年生からストレートで合格したのは、烏袋トミ、城間ヨシ、尚栄子に私の四人だったと記憶している。<sup>66)</sup>( )は西原)

小松キヨ 1915(大正4)年 知念村字久手堅 県立一高女

知念尋常高等小学校一年を終えた一九二九年(昭和四)、沖縄県第一高等女学校(一高女)を受験し、知念村からただ一人合格した。当時、女学校を受験するには競争率が高く、合格者は那覇の人が多かった。学力はもちろんのことだが、家庭環境も重視され、その結果、合格者のほとんどが教師や村長、大地主の娘たちであった。<sup>67)</sup>

上に挙げた語りは明治末から昭和初めにかけての広い世代のものだが、県女師・県立(一)高女についての高い自意識が共有されている。特に「沖縄の学習院」との物言い、入学者の家庭環境の問題等は、県立(一)高女についての

イメージを端的に示すものといえるだろう。

さらに、深見重子(1902(明治35)年生 知念間切知念村)についての評伝からは、明治末から大正にかけての時期には、親世代が女子の進学に大きな意味を見出しつつあったことがうかがえる。

弟が二人いるため、両親は補習科を卒業した重子には帽子編みをするよう、それ以上の進学を認めなかったが、重子は首里の工芸学校を親に内緒で受験して合格した。とはいえ、どうせ親が進学を許してくれないだろうからと、那覇の泊に住んでいた父の兄の所へ行き、伯母に相談した所、工芸学校に進学するのをやめて女子師範学校へ受験するようすすめられた。伯母は、自分の娘が天妃小学校に通っていたので、重子も一緒に一年間勉強させるつもりでいた。

重子は、伯母が父を説得してくれたため、もう一度高等科の二年を天妃小学校に通い、そして翌年女子師範学校に受験して合格した。<sup>68)</sup>

重子の女師受験は1915(大正4)年ごろと思われるが、実用的教育機関であった工芸学校の合格を蹴り、さらに一年を費やして格上の女師を受験させようという意識が、親世代に芽生えつつあったのである。特に女性、母にそれが芽生えたことは象徴的である。この時期の那覇においては、女子教育の意味付けに、実用的生活技術習得よりもキャリア形成を重視する傾向が現れつつあることをうかがわせる。先に触れた安村(久場)ツルや富原(比嘉)初子らの時代から、わずか十数年後であるにもかかわらずである。

また、興味深いのは、他校女学生による県女師・県立一高女評である。首里区立女師工芸学校生の森山(新垣)シズ(1901(明治34)年生 大里村與那原)の以下の語りは、両校に対する意識の一端を示している。

区立とあっては、県立の高女や官立の女子師範の足元にはとても及ばない。高女生はお嬢さん育ちが多かったし、師範生は女教師を目指す英才ぞろいである。私たちにとてもエリートに見えた。そうは言っても、自分の学校に対する誇りは強いし、また意地もある。「女学校に行ったらチャンプルーも作れない」「頭でっかちの師範生」と皮肉っていた。

だが、上の学校に行けるのはまだ恵まれた方だった。「女に余分な学問をさせると、嫁のもらい手がない」という悲しい時代である。那覇、首里でもひと握りの人で、まして與那原になると一人、二人しかいなかった。<sup>69)</sup>

こうした、自他ともに認める沖縄女子教育のトップエリートたちは、その名に恥じぬ旺盛な知的好奇心を学校生活において発揮する。前節で触れたように勝方＝稲嶺恵子は、沖縄における女子中等教育の開始を「『読む女』『書く女』の出現」と表現した。琉球国における一般的な女性と文字との距離の遠さを考えるなら、この「『読む女』『書く女』の出現」は決して小さいものではないだろう。「読む」「書く」ことは、「文明」「近代」を象徴する具体的行為として、彼女らの目前に舞い降りたのである。卒業生による回想にも、「読書」についての語りは少なくない<sup>70)</sup>。しかし、この「読書熱」は、学校公認の、いわば与えられた範囲の「知」に満足するものではなかった。真栄田泰山による玉城オト（県立高女第12回（1915（大正4）年）卒業生であり、後述する「新しい女」の一人）の評伝によれば、玉城は真栄田マカト（冬子 県立高女第12回（1915（大正4）年）卒業生であり、「新しい女」の一人）<sup>71)</sup>とともに『青踏』を読み、その影響を受けたという<sup>72)</sup>。また、外間米子による松田晶子（高女）<sup>73)</sup>の評伝でも、『青踏』の回覧について触れている<sup>74)</sup>。しかし、真栄田によれば、

沖縄県立図書館には『青踏』購入の形跡はなく、彼女らが独自に購入したものではないかという<sup>75)</sup>。「読む女」「書く女」たちは、師範学校女子講習科設置、つまり沖縄における女子中等教育の開始から20年足らずのうちに、その「設置目的」をはるかに跳び越えた、彼女ら自身にとっての「近代」へその視線を伸ばす存在へと成長していたのである。

そうした彼女らに大きな影響を与えたのは、「教員」たちでもあった。女師・高女ともに、その初期、教員の多くはヤマト出身者であったというが、県立第一高女1933（昭和12）年入学者（氏名不詳）の回想においても「一高女の特殊性として圧倒的多数の他府県出身の先生方の存在」が挙げられている<sup>76)</sup>。また沖縄出身教員にしても「ヤマト帰り」が目玉を引く。「明治末から大正初期にかけて、沖縄初期の女子遊学生が、中央から一人また二人と帰郷して、母校の教壇にたつよう」<sup>77)</sup>になったという。こうした教員は、女学生たちにとって極めて刺激的存在であったことが語りから読み取れる。そしてその刺激は、多くの場合、沖縄の外へ、ヤマトへ、東京への強い興味と憧れへと繋がってゆく。

富原（比嘉）初子（マウシ） 県立高女第2回（1905（明治38）年）卒業生、女師・高女教員

私達も先生のやうに東京の学校に行きませうね<sup>78)</sup>

喜多順 県立高女第6回（1909（明治42）年）卒業生

その頃新任の先生に市川よし、日高かつ、鍋島とよの諸先生をお迎えいたしました。先生方にすっかり甘へまして「先生東京のお話してください」とおねだり致したものでございます。女の体操先生の服が珍しく、後を付き纏つたり、甚だしきはシミーズを引張つたりする茶目の友達もありました。<sup>79)</sup>  
木口（杏）フク 県立高女第8回（1911（明治44）年）卒業生

多分四年生の頃だったかと思ひますが、東恩納よし子先生や、富原初子先生、瀬長カナ様が東京の目白の、女子大学へ、行って居られるといふので、夏休みに帰郷された時には、上級学校への入学熱に浮かされて、我も我もと、その御宿へ足繁く上つては、東京のお話をうかづつたものでした。それに、故富永先生や故秦先生が、上級学校へ進むことを、仕切りとお奨めになるので、いやが上にも入学熱をあげたものでした。<sup>80)</sup>

ちなみに富原、嘉多、木口らはいずれも東京の上級学校への進学を果たしている。

さらに、金城芳子（県立高女第15回（1918（大正7）年）卒業生）の語りからは、教員が女学生へ向け発信したのは、教育に関わるものだけであつたことも読み取れる。

一年の二学期ごろから私たちが絵を教わった与儀佳奈先生（のち瀬長）は、モダンで、目をみはらせるようなおしゃれをして私たちを魅了した。紫の地に白いシャレコウベの柄という大胆な着物、ふじむらさきのはかま、それが、背が高く色白の先生にはよく似合った。<sup>81)</sup>

瀬長（与儀）佳奈（カナ）は、県立高女第6回（1909（明治42）年）卒業生であり、最も初期の女子遊学者として、女子美に学び、帰郷後に母校県立高女の図画教員となっている。金城の語りにも現れる与儀の装いは、「モダンガール」のそれそのものである。同時期の他の教員についての語りを見る限り、与儀のようなモダスタイルの教員はやはり限られた存在であつたようだが、そんな与儀を教員として受け入れた県立高女の、あるいは時代の許容範囲の広さは興味深い。

また、教員に加え、大きな影響力を持ったのが、ヤマト出身女学生たちであつた。彼女らは、県庁官吏や裁判所等中央からの出先機関職員、裕

福な寄留商人の子女だが、女子講習科時代から一定数以上が在籍しており<sup>82)</sup>、この「ヤマト」的存在を常に内包した環境は県立（一）高女特有のものであつたのである。こうしたヤマト出身女学生については、本稿第1章第2節-3で触れたように『県立一高女同窓会名簿』からもみることが出来る。<sup>83)</sup>

ヤマト出身女学生の影響は、沖縄における女子中等教育の最初期からみられたことがうかがわれる。私立沖縄高女第1回生（1900（明治33）年入学）の比嘉カメは、「寄留商人を親に持つ方も多く、そういう方はお化粧も上手にして、すっかり大人びた雰囲気でした。」<sup>84)</sup>と語る。ヤマトにおいて「化粧」は、一定年齢以上の女子にとっての「たしなみ」とされるが、琉球国でのそれは、あくまで尾類（ジュリ：娼妓）のものであり一般女性にはほとんど縁のないものであつたという。それだけに、沖縄出身女学生にとって「化粧」は、まったく新しい「文化」として捉えられたはずである。しかもそれは、学校によって教授される「勉強」、「学問」の類ではない。自身の生活に直接係る新しい「文化」なのである。

しかし、ヤマト出身女学生と沖縄人女学生との間には、独特の緊張関係も存在したようである。金城芳子は語る。

私たちが、子供時代から対抗意識を燃やして、何かにつけて負けまいとがんばった相手はヤマトウンチュ、多くは寄留商人、医師、中等学校教師らの娘、時として県庁の役人とか裁判官などいわゆる官人（くわんにん）の娘たちだった。一中略— 沖縄の進む方向はなにはともあれ大和化であり、日本本土のやりかたに習うという政策が沖縄中に浸透している以上、もともと大和である彼らは何かにつけ私たちが追いつき追い越すかっこの目標だった。私たちは、「くしゃみするのも他府県通りに」やるどころか、相手が鹿児島なまりのくしゃみをす

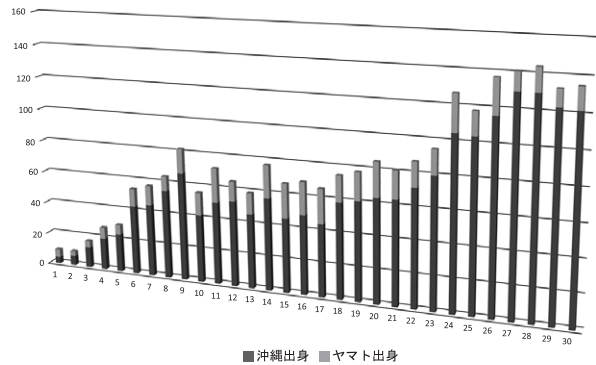


表2 卒業生数と沖縄出身者、ヤマト出身者

卒業回/年			沖縄出身		ヤマト出身		計
			実数	構成比	実数	構成比	
1	1904	明治	37	4 44.4%	5 55.6%	9	
2	1905	明治	38	6 66.7%	3 33.3%	9	
3	1906	明治	39	13 76.5%	4 23.5%	17	
4	1907	明治	40	20 74.1%	7 25.9%	27	
5	1908	明治	41	24 80.0%	6 20.0%	30	
6	1909	明治	42	43 79.6%	11 20.4%	54	
7	1910	明治	43	45 78.9%	12 21.1%	57	
8	1911	明治	44	55 85.9%	9 14.1%	64	
9	1912	明治	45	67 81.7%	15 18.3%	82	
10	1913	大正	2	42 75.0%	14 25.0%	56	
11	1914	大正	3	51 70.8%	21 29.2%	72	
12	1915	大正	4	53 81.5%	12 18.5%	65	
13	1916	大正	5	46 78.0%	13 22.0%	59	
14	1917	大正	6	57 74.0%	20 26.0%	77	
15	1918	大正	7	46 68.7%	21 31.3%	67	
16	1919	大正	8	49 71.0%	20 29.0%	69	
17	1920	大正	9	45 68.2%	21 31.8%	66	
18	1921	大正	10	59 78.7%	16 21.3%	75	
19	1922	大正	11	61 78.2%	17 21.8%	78	
20	1923	大正	12	64 75.3%	21 24.7%	85	
21	1924	大正	13	64 79.0%	17 21.0%	81	
22	1925	大正	14	72 82.8%	15 17.2%	87	
23	1926	大正	15	80 84.2%	15 15.8%	95	
24	1927	昭和	2	105 82.7%	22 17.3%	127	
25	1928	昭和	3	104 88.1%	14 11.9%	118	
26	1929	昭和	4	116 84.7%	21 15.3%	137	
27	1930	昭和	5	130 92.2%	11 7.8%	141	
28	1931	昭和	6	130 90.3%	14 9.7%	144	
29	1932	昭和	7	123 92.5%	10 7.5%	133	
30	1933	昭和	8	122 90.4%	13 9.6%	135	
			1896	81.9%	420	18.1%	2316

るならば、こっちは東京弁のくしゃみでいこうというほどの心意気で背伸びもしていたのだ。<sup>85)</sup>

表2-2 卒業生数の推移



ヤマト出身学生も、教員同様に最先端の文化、金城の言を借りるなら「モダン」<sup>86)</sup>を運び伝えた存在であった。しかし、金城の出身は那覇であり、沖縄での最先端を任ずる「都会」である。加えて女子教育のトップエンドとしての自負は、「鹿児島」を飛び越え「最先端」へ向けて自己を駆り立てる大きな動機付けであったのだろう。彼女らが求めたのは、「鹿児島」経由の型落ちし色褪せた「近代」、「モダン」などではなく、最新の「近代」、「モダン」であったのだ。

休暇に大和へ行って、帰りにはルイズまげという新しい髪型を取り入れてくる。今まで前髪を取って頭のとっぺんでリボンで結び、後ろで一つにたばねていたのを、後ろからずっと衿足を見せて髪をあげ、頂頭部に夜会巻きのような編み込みの洋風まげを載せる。たちまちみんなが真似て学校中にはやる。<sup>87)</sup>

この時期の県女師・県立（一）高女は、伊藤るりの表現を借りるなら、「教員と生徒双方の移動ネットワークの結節点をなし、多様な文化が交錯する独自の重層的な社会空間、「コンタクトゾーン」」<sup>88)</sup>であったのである。

## 第2節 県女師・県立（一）高女における高等女学校教育、女学生生活をめぐる視角

伊藤るりは、こうした女学生たちの最先端の新文化、「モダン」の自身への取り込みを、「東京」を頂点とする「帝國的序列」による女学生たちの包摂過程と捉えるが<sup>89)</sup>、同時に、それらを女学生自身による能動的、選択的行為として積極的に評価する<sup>90)</sup>。そして、それを支えたものとして「学校のなかで培われた個人としての感覚」<sup>91)</sup>をあげる。高等女学校は、良妻賢母＝良き家庭の主宰者、家庭教育の良き担い手を、また「風俗改良」の牽引者の育成を求めつつ、はからずも、覚醒する「個」を育み、近代、モダンとの「コンタクトゾーン」としての場をも提供したのである。

こうした覚醒した個の、最前衛ともいべき存在が、富原初子、真栄田冬子、玉城オト、金城芳子、新垣美登子ら、「新しい女たち」だろう。彼女らは1916（大正5）年、伊波普猷によって設立された沖縄組合教会に集う女性たちだったが、全員が県立高女卒業生である<sup>92)</sup>（さらにいうなら、富原はのちに県女師・県立高女教員となる）。彼女らの「個性」を育てたのは、まさに、県立高女という学校のなかで培われた「個人としての感覚」であった。

もちろん、学校あるいは当局は、彼女らに対して必ずしも好意的であったわけではない。1914（大正3）年3月県立高女卒業式での「告辭」において、高橋琢也県知事はいう。

固より今日の教育を受け新知識を得て新社会に出で近き将来に於て新家庭を造る妙齢の女子にして誰か新しき女にあらざるものがあるでせうか。事実皆新しき女なのです。只現今新しい女と命名するものは一種変態の行動を取る女子にして古来所謂新しからざる挙動を為し俗に謂ふ御転婆の所業を為すもの、様です。一中略一貴女方は之より本県の女子の風俗改良のことに御尽し下されたいのです。<sup>93)</sup>

高橋は、卒業生をしてすべからく今日の教育を受けた「新しい女」であると持ち上げつつも、その「新しい女」、いわば学校公認の「新しい女」についての「矩」を知ること説く。そして、その学校公認の「新しい女」の役割、「風俗改良」への積極的協力を呼びかける。沖縄における女子中等教育についての県当局の視角のあり方を象徴的に示した「告辭」であるといえよう。

前節で述べたように、沖縄における女子中等教育は、女学生たちに自身の近代化を含むさまざまな要求を突きつける「加速的で凝縮された過程」であった。しかし、彼女らは、そうした女子中等教育を、「読む」「書く」こととして自らのうちに取り込み、そこから「個人」としての感覚を培ってゆく。さらには県女師・県立（一）高女を独自のコンタクトゾーンとして機能させ、直接「東京」を、まさに時代の「最先端」を自身に取り込んでいったのである。では、こうした彼女らの目を見張るような先進性、貪欲なまでの積極性を下支えたものは何であったのか。

伊波普猷が自身の母に仮託して語るように、近代沖縄の女性（母）たちは新時代の到来と、それに応じた新たな教育の必要性そのものに敏感に反応したという<sup>94)</sup>。沖縄における廃藩置県から日清戦争後にかけての時期、ことに那覇や首里など「世がわり」による体制の流動化が顕著な環境において、具体的な「生活」そのものに視座を置いた女性たちは男性以上に鋭敏に時代の変化を捉え、それへの対応を果敢に試みたといえよう。久場、武富、富原ら、最初期の女学生たちも、そうした新しい時代（たとえ、それが結果的にはヤマト化であり、帝国たる日本への包摂であったにしても）への対応に、強い自負を持って臨んでいたといえるだろう。こうした強い自負は、県女師・県立（一）高女の強い自意識へと繋がってゆくものでもあったはずだ。

また、比嘉政夫は、琉球・沖縄の伝統的女子文化について、独自の信仰を基軸とし非識字的な特有の世界に展開された存在であり、近世日

本的でも近代日本的でもない独特の世界であったことを指摘する<sup>95)</sup>。それは、女性の霊的優位性を前面に押し立てた土着的なウナイ（オナリ）信仰を基軸とする世界であり、ヤマト的な「家：イエ」とは異なる双系的な「家：ヤー」のもと、高い手工芸技術等をもって生産力の重要な一翼を担った農村社会においてはもちろん、儒教的倫理観の強い支配下にあった士（サムレー）社会においても、なお一定の独自性を維持し続けた存在であったという。比嘉は、近世琉球国における女子の自立性や社会的位置は、必ずしも低いものではなかったのではないかと問う。こうした視角からすれば、「世がわり」に際して見せた積極性、先進性も近世琉球国女子文化が内胎した潜在力の発現と理解することもできるかもしれない。

勝方＝稲嶺恵子は、こうした琉球国女子文化の独自性を前提としつつ、明治以降の沖縄における女子教育について、「識字」、「日本的近代」＝「風俗改良」、「標準日本語」という三つのキーワードを提示し、「前代未聞の文化変容」をもたらした存在と捉える。そしてその文化変容は、個人内部の葛藤や世代間の断絶・確執・衝突をも生み出したと述べる<sup>96)</sup>。さらに「近代教育が沖縄女性にもたらした第一の変化は、文字の学習が許されたことだろう。」とし、つづけて「口承文化は話す者と聞くものを統合し、和を奏でる「場」を優先させるのに対し、書承文化は、文字を読み解く読書の発達に伴って、分類・分析する「個」を誕生させることになる。」<sup>97)</sup>と述べる。

勝方＝稲嶺の言に沿っていうなら、沖縄の女学生たちは、自らの出自たる伝統的な女性文化から、女学校を、また女子中等教育そのものを触媒として自身の「個」を生み出していったといえよう。県女師・県立（一）高女は、文字通りの「新しい女」たちを生み出すべくして生み出したのである。そうした意味においても、沖縄における女子中等教育は、まさに「加速度的

で凝縮された過程」であったのである。

#### 第4章 当事者（教員、女学生）にとっての改名—改名をめぐる「大きな物語」と「小さな物語」

さて、これまで見てきた沖縄における女子中等教育において、また県女師・県立高女において、女学生の改名とはいかなる文脈上に配置される事象であったのか。本章では、教員、卒業生の語り、評伝を、また『県立一高女同窓会名簿』を読み解くことを通して、まず沖縄県女師・沖縄県立（一）高女における女学生の改名とはいかなる行為であったのか、つまり女学生の改名をめぐる「大きな物語」を捉えることを試みる。そのため、改名についての語りを時系列的に整理しその展開過程の把握を行う。ついで、そこから浮かび上がるいくつかの視角を整理し、それらに依拠しつつ、県女師・県立（一）高女の個々の女学生にとっての改名とはいかなる行為だったのか、改名により何を、また何者となることが目指されたのか、という女学生の改名をめぐる「小さな物語」を読み解くことを試みる。

##### 第1節 改名をめぐる「大きな物語」—女学生の改名についての時系列的展開とそれをめぐるいくつかの視角

###### -1 明治年間

最も初期の女学生の改名についての語りは、本稿冒頭でも触れた宮城文（大濱ナヒヤマ）によるものである。宮城は、1891（明治24）年生、県立高女第8回（1911（明治44）年）卒業生。1908（明治41）年に改名を行っている。

八重山、沖縄で女子の改名の先端は、おそらく私だったと思う。当時の女学生の名前は、男と違って童名が使われていた。八重山の童名は、本島のものとはだいぶ違うので、珍しがられ冷笑されていた。

ちょうど二年生の級長辞令交付の時、我謝教頭が私の名「ナヒヤマ」を一度で読めず、ナヒ、ナビ、ナビヤ……とモトイ、モトイの連続にどっと笑い声。赤面した私は、辞令を受ける勇気もなかった。早速、父に「改名して下さらないと退学するつもりです」と便りを出した。三週間後に「ナヒヤマを“文”に改名する」と書かれた改名証が、父から送られてきた。それで母方祖母譲りの愛称と別れたわけである。

「文」とは私が選んだ名で、文章が苦手な私の上手になりたい一心からである。続いて豊川ミタコが敏に、翌年には新嘉喜マツルが操と替え、次第に改名するものが増えてゆくようになった。<sup>98)</sup>

この前後の時期（1900年代初頭）には、女学校外でも女子の〈なまえ〉についての変化がいくつみられる。

1906（明治39）年には、県立高女第一回卒業生の尚オミトの結婚についての記事が同窓会会報『おとひめ』に掲載され、その中で結婚を機としてのオミトから「のぶ子」への改名が伝えられている<sup>99)</sup>。また、富原初子（県立高女第2回卒業生（1905（明治38）年）は、日本女子大への進学を機としてのモウシから「初子」への改名をおこなっているが<sup>100)</sup>、これもほぼ同時期であろう。さらに千原（渡嘉敷）繁子（1898（明治31）年生 県立高女第12回卒業（1915（大正4）年）は、1905（明治38）年に那覇市立松山小学校に入学、カマドから「繁子」への改名を行なったことを述べており<sup>101)</sup>、これも宮城、尚、富原らの改名とほぼ同時期である。

さらに、若干遡ることになるが、1902（明治35）年生の金城芳子は、自身の〈なまえ〉について「名前は幼いころにはマヅル、愛称はマージュだった。母はヨシと届け出た。」と語り、また「私が幼稚園の頃の女の子の名は、ほとんどモウシ、ツル、ナベ、カメ、つまりモウシー、

チルー、ナビー、カミー、だった。それが女学校の頃には同じ人がカオルとか、ヒデ、栄子とか、大和名に変わっていった。生まれた子どもに祖父や祖母の名をつけるという旧来の習慣がまだ守られていたのが、社会の激変でそれではあきたらなくなり、現代風に直す風潮になったのだろう。」<sup>102)</sup>と語っている。また、1906（明治39）年生の具志頭善子<sup>103)</sup>は「昔は大抵の人にワラビナーというのがありましたが、私はありませんでした。善子という名前だけです。」<sup>104)</sup>と述べており、1900年代初頭、明治30年代半ばから、少なくとも那覇、首里周辺では（具志頭は首里、金城は那覇・辻の出身）出生時のヤマト名命名や小学校入学後の改名が始まりつつあったように見える。これらのことから考えると、この1900年代初頭という時期は、沖縄女性の〈なまえ〉に大きな変化、すなわち伝統的な童名による命名という制度（習慣）の弛緩、ヤマト名での命名あるいは改名の始まった時期であった可能性が強い。

『同窓会名簿』にも、これらに関連すると思われる変化をみることができる。「表3 一高女卒業生の童名、改名、童名+改名、ヤマト名1933（昭和8）年時」は、各卒業回ごとの〈なまえ〉を童名、改名、ヤマト名に分け、その実数、構成比（母数は沖縄出身卒業生数）をまとめたものである。

本稿第1章第2節-3において述べたように、これらはあくまで1933（昭和8）年時点での卒業生の〈なまえ〉事例である。ここに見られる改名についての事例は、一高女卒業後に童名からヤマト名へ改名した事例と考えられ、在学時と名簿編集時（1933年）では、〈なまえ〉が異なっているために名簿に記載した、と仮定するなら、童名と改名の合計は在学中に名乗られていた童名数と推定することができる。またヤマト名は、在学中から名乗られていたヤマト名（在学中に改名された事例も含まれる）と推定することができる。1908（明治41）年、在学中に改名を行なっ

表3 一高女卒業生の童名、改名、童名+改名、ヤマト名 1933（昭和8）年時

卒業回/年				年齢	ヤマト出身	沖縄出身	童名		改名		童名・改名		ヤマト名	
1	1904	明治	37	46	5	4	3	75.0%	1	25.0%	4	100.0%	0	0.0%
2	1905	明治	38	45	3	6	3	50.0%	2	33.3%	5	83.3%	1	16.7%
3	1906	明治	39	44	3	13	8	61.5%	5	38.5%	13	100.0%	0	0.0%
4	1907	明治	40	43	7	20	13	65.0%	6	30.0%	19	95.0%	1	5.0%
5	1908	明治	41	42	6	24	17	70.8%	5	20.8%	22	91.7%	2	8.3%
6	1909	明治	42	41	11	43	27	62.8%	14	32.6%	41	95.3%	2	4.7%
7	1910	明治	43	40	12	45	16	35.6%	11	24.4%	27	60.0%	18	40.0%
8	1911	明治	44	39	9	55	31	56.4%	4	7.3%	35	63.6%	20	36.4%
9	1912	明治	45	38	15	67	31	46.3%	17	25.4%	48	71.6%	19	28.4%
10	1913	大正	2	37	14	42	23	54.8%	3	7.1%	26	61.9%	16	38.1%
11	1914	大正	3	36	21	51	31	60.8%	6	11.8%	37	72.5%	14	27.5%
12	1915	大正	4	35	12	53	24	45.3%	16	30.2%	40	75.5%	13	24.5%
13	1916	大正	5	34	13	46	21	45.7%	6	13.0%	27	58.7%	19	41.3%
14	1917	大正	6	33	20	57	26	45.6%	11	19.3%	37	64.9%	20	35.1%
15	1918	大正	7	32	22	46	21	45.7%	9	19.6%	30	65.2%	16	34.8%
16	1919	大正	8	31	20	49	16	32.7%	3	6.1%	19	38.8%	30	61.2%
17	1920	大正	9	30	21	45	11	24.4%	2	4.4%	13	28.9%	32	71.1%
18	1921	大正	10	29	16	59	17	28.8%	5	8.5%	22	37.3%	37	62.7%
19	1922	大正	11	28	17	61	12	19.7%	6	9.8%	18	29.5%	43	70.5%
20	1923	大正	12	27	21	64	11	17.2%	1	1.6%	12	18.8%	52	81.3%
21	1924	大正	13	26	17	64	15	23.4%	3	4.7%	18	28.1%	46	71.9%
22	1925	大正	14	25	15	72	20	27.8%	2	2.8%	22	30.6%	50	69.4%
23	1926	大正	15	24	15	80	12	15.0%	5	6.3%	17	21.3%	63	78.8%
24	1927	昭和	2	23	22	105	18	17.1%	2	1.9%	20	19.0%	85	81.0%
25	1928	昭和	3	22	14	104	14	13.5%	2	1.9%	16	15.4%	88	84.6%
26	1929	昭和	4	21	21	116	8	6.9%	0	0.0%	8	6.9%	108	93.1%
27	1930	昭和	5	20	11	130	23	17.7%	1	0.8%	24	18.5%	106	81.5%
28	1931	昭和	6	19	14	130	21	16.2%	0	0.0%	21	16.2%	109	83.8%
29	1932	昭和	7	18	10	123	15	12.2%	0	0.0%	15	12.2%	108	87.8%
30	1933	昭和	8	17	13	122	11	9.0%	0	0.0%	11	9.0%	111	91.0%
					420	1896	519	27.4%	148	7.8%	667	35.2%	1229	64.8%

\*年齢は推定される1933年時点での年齢

\*童名、改名、ヤマト名の構成比は沖縄出身者数に占める割合

た宮城文は、『同窓会名簿』には改名後のヤマト名のみを載せている。同郷の友人、豊川敏<sup>105)</sup>についても同様である。

これらの点に注意しつつ表3を見る。第6回卒業生（1909（明治42）年卒業）までは、童名・改名（在学中に名乗られていた童名）が圧倒的

であり、ヤマト名（在学中に名乗っていたと考えられるヤマト名）はごく少数である（上述の尚のぶ子も富原初子も、それぞれ旧名としてオミト、マウシを載せている）。ところが、第7回卒業生（1910（明治43）年卒業）を境に童名・改名の割合は90%代から一気に60%に落ちる（図中実線）。これは、第7回卒業生では第6回卒業生に比して在学中に名乗られていた童名が大きく減少したということを示すと考えられるが、逆にいえば、在学中に名乗られていたヤマト名が大幅に増えた、ということになる。これだけの極端な変化は、この時期に女子の〈なまえ〉についての急激な変化が起きたことを示唆するが、その変化には在学中の改名も少なからず含まれていると考えてよいだろう。宮城文は自身の改名後、「次第に改名するものが増えてゆくようになった。」と述べており、まさにこのタイミングに重なる。

1900年代初頭、明治30年代半ばごろから現れはじめた女子の〈なまえ〉の変化は、明治40年代、女学校において顕著な動きとなるに至ったと考えられる。1880年の戸籍調整を経ても、大きな変化のなかった女子の〈なまえ〉は、この時期を境に変化を見せ始めるのである。県立高女女学生の改名は、こうした文脈上に配置される事象とみることができるだろう。ただ、この女学生の改名と女子名そのものの変化との関係（女子名の変化が女学校に波及した結果が女学校での改名であったのか、あるいは逆に女学校での改名が契機となり女子名の変化が広がったのか）については、必ずしも明らかではない。もちろん、これまで述べてきたように、県女師・県立高女、また両校女学生は「特別」な存在であり、彼女らの振る舞いが一定以上の影響を及ぼしたことは間違いないだろう。この問題については、同時期の女学生以外の女子の〈なまえ〉についての視角、さらに初期県政期とその後の転換期における沖縄社会そのもの変容についての視角を踏まえ、稿を改め考えてゆきたい。

## -2 大正年間～昭和初期

女学校での改名は、大正期から昭和へかけて、さらに広がりを見せる。

深見（森山）重子（ゴゼイ） 1902（明治35）年生 県女師

翌年女子師範学校に受験して合格した。そのころ友達と二人で、平重盛から一字とって重（しげ）という名前に改名した。それが後に重子になるのである。<sup>106)</sup>

加藤トハ 1919（大正8）年～1920年 県女師・県立高女教員

学校に入学してから名前を変える人が多く、役場から承認の書類が届けられた。<sup>107)</sup>

宮里（宮城）悦（ウトー） 1909（明治38）年生 県女師 1920（大正9）年入学

幼名は「ウトー」。女子師範に入るときに、「悦」というスマートな大和名に変えた。愛称は「ウーマンカー」で“小さいおばさん”という意味。なぜこんな名前がついたのか覚えていないが、師範の先生までもがそう呼んだ。<sup>108)</sup>

国吉伸子（ウト） 1913（大正2）年生 県女師 改名は在学中の1927（昭和2）年

どこでどういう風に手続きしたのか忘れましたが、簡単に変えられた。教師になるのだからと親を説得したことを覚えている。ほとんどの人が夏休みに名前を変えていました。<sup>109)</sup>

仲真恒子 県女師 1927（昭和2）年入学、1932（昭和7）年卒業

さて洋服という便利で目新しい服装で、さっそうと通学はしたものの、名前は依然として沖縄名（ウチナーナー）が多かった。ツル、カメはともかくとして、ウト、オト、ウシ、マツ…と、ほとんどが子のつかないかたかなの名前であった。その他にも、ナベ、カマ、マカト等という面白いのもあった。和服から洋服に変わった所で沖縄名も大和

名(ヤマトナー)に変える運動が盛り上がり、それぞれ自分で手続きをして、すてきな大和名にかえた。一例を上げると一年の時の通信簿のウトやオトが、二年の時には節子、恒子、春子、伸子、洋子等と大和なみの名前に変わり、しばらくはうれしい様な恥ずかしい様な思いであった。以後大和名に改めるブームが続きかたかなの沖縄名はほとんどなくなっていった。<sup>110)</sup>

新垣良栄 県女師・県立（一）高女体育教員

今はマウシ子様と云つたやうな名前は本校には只一人しか居ないが、其の頃はざらに居た。マツ、タケ、ウメからツル、カメ等は良い方で、ナベ、カマからウマは居なかつたがウシまで居た。尚ほ聞く丈でも可笑しなマカト子、カマデ子、カマド子、オ八重、オナベ等があり、姓にも東森根小、東田盛、勢理客、とか大工廻等があつて、他県から始めて見えた先生方を困らせ苦笑させたのでした。それは兎も角卒業後県内外の実社会に立つて、之れで本県の紹介には良かつたかも知らないが、個人的には大分損した方が多かつたのです。川平校長が改名勧誘をされたのも当然の理でした。幸ひ今日では一人の外は可笑しな名前の方ではなく、実に洒落たものである。千代子、良子、栄子、貞子、操子、君子等から明子、治子、大子は居ないが、正子、昭子、和子等と、日本国中何処へ行つても恥ぢない、立派な名前になつて居る事は格段の進歩である。<sup>111)</sup>

本稿冒頭で触れた柳田國男の「○女学生の改名のこと」とのメモは1921（大正10）年1月のものであり、加藤トハが「学校に入学してから名前を変える人が多く、役場から承認の書類が届けられた。」と述べた時期にあたる。この時期の改名についての語り興味深いのは、新垣良栄の語りに現れる川平朝令校長<sup>112)</sup>の「改名勧誘」

である。この「改名勧誘」については、具体的内容を示す資料や語りがなく詳細については不明である。時期的には川平校長の在任期間から考えて昭和10年代初頭とみられるが、この時期の沖縄は戦時体制構築期に当たり、統制化、皇民化的傾向を強く帯びた「風俗改良運動」が展開される時期でもある。1935（昭和10）年には、沖縄県中小学校校長会でも「改名改姓」についての議論がなされたといひ<sup>113)</sup>、さらに1937（昭和12）年には島袋源一郎らを中心とした沖縄県教育会によって「改正氏姓呼称法」<sup>114)</sup>の発表などが行われており、名前のヤマト化：「改姓」「改名」は推進されるべき教育政策の一つであったことがうかがわれる。さらには、この時期は在ヤマト沖縄人社会において言語（方言・ウチナーグチ）、生活習慣、飲酒・食生活、琉装、姓名等についての脱沖縄化、「他府県並」化、ヤマト化を推進しようとする「生活改善運動」が推進された時期でもある。この生活改善は、在ヤマト沖縄人がさらされてきた差別への身構え・回避、また生活上の利便性確保を梃子として展開されたヤマト化の推進であったが、その目指したところは、新垣の語り、「日本国中何処へ行つても恥ぢない、立派な名前になつて居る事は格段の進歩である。」にも見て取ることができる。

だが、沖縄の「風俗改良」=近代化、「他府県並」化は、明治以来の一貫した流れであり、これまでみてきたように女学生の改名に限って見ても、この時期（昭和10年代）に突然現れたものではない。これらの、つまり明治以来のヤマト化と、昭和10年代以降の戦時体制構築に伴う統制強化との位相関係は、必ずしも明らかではない。しかし、こと県女師・県立（一）高女における改名を含めた近代化、ヤマト化=他府県並化は、先に触れたような女学生個々の近代化、「モダン」への希求（もちろんその近代化への希求自体が、ヤマトによる琉球の包摂によって作り出されたものなのだが）に裏打ちされた存在であり、「お上から下しおかれる」という意味で

の「政策的」な戦時体制構築、文化的統制によってのみなされたものではないだろう。この「政策」としての統制と、個々の「近代」、「モダン」への指向との位相関係は、在ヤマト沖縄人社会における「生活改善運動」の在り様とも係る大きな問題である。このこともまた、今後の課題として稿を改めて考えてみたい。

学校と改名に係る視角において、いまひとつ注目したいのが教職と改名の関係である。教職は高等女学校卒業後の代表的な進路として挙げられる。県女師は当然として、県立第一高女卒業生にも教員は少なくない。先に触れたように、沖縄において女性教員は「風俗改良」等の同化・統合化、また近代化の先兵たることを求められた存在であった。では、こうした立ち位置にあった女性教員と改名との関係はいかなるものだったのだろう。前出の県女師女学生、国吉信子の語りからは、将来教職に着くことが改名のインセンティブとなっている（あるいは、それをインセンティブとして「説得」に用いた）ことが、また県女師では在学中の改名が広がっていたことがうかがわれる。「風俗改良」の先頭に立つことを求められてきた女性教員が、先にあげた琉装から和装への転換と同様に、自身の「近代化」として〈なまえ〉のヤマト化を求められた可能性は十分に考えられよう。

この問題についても『同窓会名簿』をあたってみる。同名簿には、1933（昭和8）年時点での職業についての記載があり、卒業生2,316名中、321名が幼稚園、小学校、女学校、高等女学校等の教員となっていることがわかる。このうち沖縄出身者は288名、沖縄出身卒業生1,896名の15.2%に当たる。彼女らの〈なまえ〉とはいかなる名前だったか。なお、これまでは名簿上の〈なまえ〉から在学中に名乗っていたと考えられる〈なまえ〉を抽出するため、童名と改名の合計：「在学中に使用していたと思われる童名」に注目してきたが、ここでは童名、改名を分けて考える。これは、名簿上の童名を「1933（昭和8）年時点

で使用されている〈なまえ〉」、改名を「卒業後の改名」と仮定し、名簿上の童名を「改名されなかった童名」＝「生き残った童名」とみるということである。

さて、県立（一）高女出身教師288名の1933年時点での〈なまえ〉内訳は、童名42例14.6%、改名29例10.1%、ヤマト名217例75.3%（構成比は県立（一）高女卒沖縄出身教員数に対する構成比）となる。教員以外の沖縄出身卒業生の総数は1,608名。その〈なまえ〉は、童名479例29.8%、改名118例7.3%、ヤマト名1,011例62.9%となり、童名については倍近くの開きが存在する。このことから、教員が改名に比較的積極的であったことはうかがえるだろう。

しかし、『同窓会名簿』からは、比較的若い世代（卒業回の新しい卒業生）の教員にも童名が依然一定程度存在するなど、教員がすべからくヤマト名に改名したとは言い切れない状況にあったこともわかる。時間的には遡るが、1913（大正2）年5月1日付け『沖縄毎日』掲載の「島尻郡内女教師内地観光団」（1913年）<sup>115)</sup>には、24名の女性教員が名をつられているが、伝統的童名を名乗る者が18名にもものぼっている。この記事では、参加教員の年齢層等不明な部分が多いが、教員と改名との関係は、「女性教員の〈なまえ〉＝ヤマト名」といえるような単純なものではないかもしれない。この教員と改名の問題についても、今後さらに踏み込んで検討すべき課題といえる。

## 第2節 改名をめぐる「小さな物語」—女学生の「個」と「同化」

これまで述べてきた、1900年代初頭における女子の〈なまえ〉変容、改名についての学校の関与、改名と教員等々の視角を踏まえつつ、以下、当事者である女学生が語る、自身にとっての改名、すなわち改名についての「小さな物語」を読み解くことを試みる。

何度か触れたように、そもそも沖縄における



高等女学校が「風俗改良」＝ヤマト化・脱沖縄化・近代化と深く関わる存在、いわば「近代化の装置」である以上、女学生にとっての改名は、その方向がヤマト化である限り、いわば「当然の帰結」であったともいえよう。前出の国吉の語りにある、教師となることを理由としての説得なども同様に、優れて県女師女学生的な文脈上で語られる改名であるといえるだろう。また、新垣の語りにある「日本国中何処へ行つても恥ぢない、立派な名前」のように、在ヤマト沖縄人社会における「生活改善運動」的な、差別への身構えや生活上の利便性を見据えた動機も見える<sup>116)</sup>。

しかし、こうした、明瞭でわかりやすく、また合理的でもある(あるいは「合理的にみえる」)理由付けによるものとは別の、「スマートな大和名」(宮里悦)、「すてきな大和名」(仲真恒子)といった、不明瞭な、必ずしも合理的な理由づけに沿ったものでもない、もっと「個」的な動機付けによる改名についての語りも存在する。

宮城文は、「母方祖母譲りの愛称」と表現した自身の童名ナヒヤマについて、退学をかけてまでの改名を図る。そこには、利便性という問題ももちろん大きく介在したであろうが、それにもまして近代的な〈なまえ〉を、自身が名乗ること、その名をもって呼ばれることへの「県立高女女学生」としての欲求が強く感じられる。

さらに注目したいのが、改名が多くの場合「名乗り」的要素を含んだ行為であったということである。宮城は、苦手な文章の上達を願い「文」を、深見は平重盛から一字をとって「重」を名乗る。彼女らの改名への欲求は、この「名乗り」にもあったとはいえないだろうか。本稿冒頭で触れたように、琉球・沖縄の伝統的〈なまえ〉：個人名：童名は、個を特定する機能に乏しい、むしろ祖先からのつながりを表示することを意味する存在であった。勝方＝稲嶺のいう「読む女」「書く女」、「個」として「近代」を希求する娘たちは、この名付けられた童名を脱ぎ、他の誰でもない自身の呼称として、名乗りたい〈なまえ〉、

呼ばれたい〈なまえ〉を纏うことを選択してゆく。在学中の改名ではないが、県立高女第2回(1905(明治38)年)卒業生の富原初子は、卒業後「日本女子大への進学のため上京が決まった時、友人からモウシという名を改めたらと言われ、伊波(普猷)に相談したところ、「初音」にしたらと言われた。しかし料亭の名に「初音」があったので「初子」とした。」( )は西原<sup>117)</sup>という。ここにも名乗りについての自身の「意思」と、それに根ざした「選択」が見てとれる。

県女師・県立(一)高女が、「近代」、「モダン」とのコンタクトゾーンとしての役割を担った存在であったことは前節で述べた。金城芳子が語るように、「モダン」化は彼女らの日常、いうならば「県女師・県立高女生ライフ」の大きな構成要素となっていたことが窺われる。宮里、仲真の語る改名は、まさに自身の「モダン」化にほかならないだろう。近代的〈なまえ〉を纏うことによって自身そのものの「モダン」化が始まるのである。

そして、重要なのは、この改名が、学校あるいは体制の求める近代化と、彼女らの求める「モダン」化との間の微妙な均衡が保たれた領域に位置するものであったという点であろう。当然のことながら、流入する様々な近代、「モダン」のすべてが学校当局にとって歓迎すべきものであったわけでは、決してない。先に引用した、認めるべき「新しい女」と認められるべきではない「新しい女」に言及した高橋県知事による県立高女卒業式(1914(大正3)年3月)「告辭」が象徴的に示すように、文明化にも近代化にも許可されるべき範囲が存在した。ヤマトへの同化、帝国たる日本への統合化としての文明化、近代化こそが、望ましい文明化、近代化であり、「モダン」化は必ずしも望ましい文明化、近代化ではなかったといえよう。そうした中において、改名は「モダン」化ではあったものの、学校にとっての望ましい近代化でもあったといえる。改名の方向がヤマト化である以上、そこに当事者個々

のいかなる想いが仮託されていたとしても、それを妨げることはできない。また、この「モダン」化は、ファッション、髪型、映画、洋食、ダンス等々の消費文明ともすぐには直結しない。もちろん改名が、本当に学校当局にとってなんの心配のないものであったのかどうかはわからない。しかし、少なくとも学校当局にとっての改名は、あくまで同化、ヤマト化、近代化、また差別への身構え、利便性確保のためのものであったのだろう。昭和に入って以降、県女師・県立（一）高女の女学生に対する管理、特に校外での行動についての規制は厳しくなったといわれるが<sup>118)</sup>、その時期にあつて、なお「改姓改名」は校長会での議題となり、「改名勧誘」が校長主導によって行われたのである。

沖縄における女子中等教育は、「読む女・書く女」<sup>119)</sup>を生み出し、彼女らは高等女学校という場を様々な情報の流入するコンタクトゾーンとし、さらにはそこを苗床として「個人としての感覚」<sup>120)</sup>を培った。それらは学校当局の策定する教育目標、近代化の担い手とは、重なりつつも異なる、「同床異夢」な存在であったといえるだろう。県女師・県立（一）高女における女学生の改名もまた、同化・統合化、「他府県並」化としての〈なまえ〉のヤマト化でありながら、同時に女学生自身の「個」の選択による自身の近代化であり、「モダン」化であり、さらには「名乗り」であったのである。

### むすびにかえて

これまで見てきたように、県女師・県立（一）高女女学生の改名は、教員、女学生による語り、また『同窓会名簿』等からみて、1900年代（明治40年代）初め頃に始まり、大正、昭和を通じて次第に拡大してきたと考えてよいだろう。彼女らの改名は、冒頭述べたように、日本政府の政策である近代化、同化政策と同じ文脈上にあることは、県女師・県立（一）高女という学校の沖縄女子教育に占位する位置からみても、ま

た「女学生」という存在の女子教育、また沖縄社会での位置づけから考えても間違いないだろう。さらに、改名は、沖縄が（沖縄人が、沖縄社会が）、日清戦争後に選択した（事実上選択せざるを得なかった）近代化＝ヤマト化への転轍によって、同時に抱え込まざるを得なかった「他府県並み」化への希求、またそこにべったりと張り付く脱沖縄化への希求という文脈にも深く係る存在であったといえるだろう。1900年代初頭における女子の〈なまえ〉の変容、教職と改名、学校の改名への関与等は、こうした視角に大きく係る。冒頭触れた鹿野政直による女学生の改名についての指摘<sup>121)</sup>、また波平恒男による、同化・統合化、戦時体制の構築・強化は、沖縄人の差別への身構えや利便性の確保、「他府県並」化への希求を梃子として浸透していったとする指摘<sup>122)</sup>は、なお傾聴すべきものであろう。彼女らの改名が、個々の「内発」的な近代への希求によって突き動かされたものであったとしても、その「内発」性そのものが、同化・ヤマト化の浸潤を免れ得ないのである。

しかし、それでも彼女らの選択（ここでは改名）が内胎する「「個」としての選択」の在り様、すなわち改名をめぐる「小さな物語」を、沖縄近現代史（琉球処分・併合以後戦後に至るまでの歴史）のなかに捉えることの意味を思わざるを得ない。これまでみてきたように、女学生たちは、「近代化」「他府県並化」のための装置であった女学校にあつて、「読む」「書く」を通して得た「個」を拠り所として、さらに「近代」「モダン」への接近を図る。彼女らの改名には、そうした「個」のレベルでの「近代」化、「モダン」化としての意味が織り込まれていたことがうかがわれる。そこには、単線的な「近代化」＝「ヤマト化」だけでは括りきれない、彼女ら自身による「名乗り」（「名乗りたい〈なまえ〉」「呼ばれたい〈なまえ〉」の自身による命名）という極めてパーソナルな「近代」あるいは「モダン」への接近が感じられる。

さらにいうなら、1900年代初頭に起こる女子の〈なまえ〉の変容についても、琉球国から「沖縄県」へという日本による沖縄の包摂過程における、女子像そのものの変容、あるいは女子への視線（あるいは、母から娘へのそれを含む、女子自身の自身へ向けての視線）の変化、を象徴的に示す事象であるといえるかもしれない。それは、まさに「新しい女たち」が身につけるべき「新しい〈なまえ〉」であったのだろう。そしてそこには、トップランナーたる県女師・県立(一)高女女学生たちの存在、振舞いが少なからぬ影響を及ぼしたといえるだろう。

しかし、同時に注意したいのは、そうした彼女らがなご密かに抱えていたであろう童名への愛惜である。宮城文は、退学をかけてまで自身の改名を父親に認めさせる。が、同時にその改名を「母方祖母譲りの愛称と別れて」とも記す。卒業期第20回後半という昭和初期における県立一高女卒業生にもみられた童名、教職に就いたものがなご名乗る童名等にもそれが感じられるが、童名自体が、個別識別機能よりも受け継がれてゆくということそのものに意味を見出される存在であるとするなら、そうした愛惜が彼女らのなご密やかに存在していたのかもしれない。県女師・県立一高女女学生の改名とは、そうしたいくつもの要素の重なる多層的な事象であったのである。

1945(昭和20)年2月26日の『琉球新報』には、この年の県立一高女合格者<sup>123)</sup>171名の氏名が掲載されている。彼女らは、最後の県立一高女合格者である。一部不鮮明であり、必ずしも全員の〈なまえ〉が確認できるわけではないが、童名はツル2名(他に童名の痕跡を感じさせるツル子2名、マツ子1名)が確認できるのみである。彼女らの年齢を12歳とするなら、生まれは1933(昭和8)年前後となる。県立一高女受験生たちは、仲真恒子の語ったような一高女ライフの中での「うれしい様な恥ずかしい様な」改名を待つことなく、そのほとんどがヤマト名を名乗っている。

それは、この1945年2月時点での沖縄の同化・統合化、脱沖縄化、戦時体制構築の一定程度の完成を示したのか、あるいは、すでに「女学校」、「女学生」の時代とは異なる時代となったことを示しているのかもしれない。

しかし、何度か述べたように、県女師・一高女は沖縄の女子教育においても、沖縄社会においても間違いなく特別な存在であった。したがって、その彼女らの〈なまえ〉の問題を、沖縄における女子の〈なまえ〉全体に敷衍することはできない。法制史の西原諄は「戸籍法制の変遷と問題点」において、1960年代における「改名事件」(改名に関する裁判所への申立て)の事由について触れているが、60年代においても珍奇、難読、同姓同名者が多い、異性と紛らわしい等々、童名にまつわると思われる改名申立てが少なかつたことを述べている<sup>124)</sup>。60年代の改名事件当事者の年齢層については必ずしも明らかではないが、20代、30代と仮定するなら1930～40年代生まれとなり、最後の県立一高女合格者たちと重なる世代となる。県立一高女最後の合格者の〈なまえ〉は、やはり「県立一高女を受験する娘たち」の〈なまえ〉であったのかもしれない。

本稿では第4章第2節において女学生の改名をめぐるいくつかの視角を提示した。これらは、本稿冒頭において述べた、近現代沖縄(琉球処分・併合以後戦後に至るまでの沖縄)における女子の〈なまえ〉に係る問題を視座として沖縄の近現代(琉球処分・併合以後戦後に至るまでの歴史)を捉えなおすための視角でもある。しかしながら、そうした視角には、より高い解像度での女子の〈なまえ〉についての理解が必要となることはいうまでもない。具体的には、第二、第三高女、女子工芸学校、私立積徳高等女学校等々の県女師・県立(一)高女以外の女学生の〈なまえ〉、また女学生以外の同時代の女性(例えば出稼ぎ女工たち)の〈なまえ〉をも射程に入れた論考は不可欠であろう。今後の課題としたい。

## 注

- 1) 1921 (大正10) 年1月15日から21日の間の訪問と思われる。
- 2) 柳田國男『南島旅行見聞記』酒井卯作編 林話社 2009 p.94
- 3) 源武雄「第二編 特別区の時期 第14章 生活様式の変化と風俗習慣 第一節 生活様式の変化」『那覇市史 通史編 第二卷 (近代史)』那覇市企画部市史編纂室 1974 p.467
- 4) 太田良博「改姓改名運動」『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社 1983 上巻 p.660
- 5) 「明治三十年代以降の、沖縄における風俗改良運動は、時代にめざめた民衆の中から自発的に起こったものであったか、国策的に誘導されたものであったのか、判断しにくい。」太田良博「第四章 生活・風俗 第三節 交際・風俗 二 風俗改良運動の特色」『沖縄県史 5 文化1』沖縄県教育委員会 1975 p.417
- 6) 波平恒男「第6部 同化・差別・皇民化 第一章教育の普及と同化の論理 第五節明治後期における下からの同化志向」『沖縄県史各論編5 近代』沖縄県教育委員会 2011 p.500～504
- 7) 本稿では、琉球・沖縄との対置における日本を、近世以降現代に至るまで広く用いられてきた「ヤマト」という語をもって表記するものとする。
- 8) 鹿野政直「「沖縄」と「琉球」の狭間で一戦後の出発」『戦後沖縄の思想像』1987 朝日新聞社 p.11
- 9) 以下、沖縄県女師、あるいは県女師
- 10) 以下、沖縄県立 (一) 高女、あるいは県立 (一) 高女
- 11) 「名前」とは、人や物の名称、呼称を意味するが、人の名前には、多くの場合、姓や氏、苗字等の集団の名称と個人名が含まれる。本稿では、個人名を、名称、呼称全体を指す「名前」の語と区別するため、〈なまえ〉と表記する。
- 12) このサムレー/士は、その音韻、漢字表記から、日本における武士、士族階級と混同されがちだが、サムレーは武人というよりは、中国における「士大夫」、朝鮮における「両班」に近い存在である。
- 13) このヒャクショーは、農民に限定されない平民全般をさす。農民についてイナカビャクショー、都市の商工民についてはマチビャクショーと称する。
- 14) 東恩納寛惇「琉球人名考」1924 (大正13) 年 p.364 『東恩納寛惇全集 6』1989 琉球新報

社編 第一書房

- 15) 崎原恒新「生児儀礼」『奄美・沖縄の祝事』崎原恒新 恵原義盛 明玄書房 1977、高田峰夫「琉球列島における命名法の一考察—童名の命名法を中心として—」『日本民俗学』174 1988
- 16) 上野和男「沖縄の名前と社会—閉鎖的な名前体系の一事例として—」『琉球・アジアの民俗と歴史 国立歴史民俗博物館比嘉政夫教授退官記念論集』2002 (平成14) 年 榕樹書林
- 17) このことは、琉球・沖縄の〈なまえ〉がヤマト (日本) の影響をまったく受けなかったということの意味するものでは決してない。ヤマト、また中国の〈なまえ〉に及ぼした影響については、東恩納寛惇、上野和男らによって指摘されることである。
- 18) 伝統的な童名である「マツ」「カメ」を、漢字表記に変え「助」「吉」「太郎」「一」等を加えてヤマト名風とした〈なまえ〉。
- 19) 西原彰一「琉球国末期の人名表記について—一八〇〇年代後半の文献史料に見られる人名を手がかりとして—」『歴史民俗資料学研究』第21号 2016 神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科
- 20) 例えば、1903 (明治36) 年の「砂糖消費税法改正之儀ニ付請願」にみることができる、国頭郡名護間切の新城松一 (安政元年生)、中地松三郎 (嘉永4年生)、仲地松吉 (元治元年生)、大城松助 (安政4年生) などは、その典型といえるだろう。いずれも1880 (明治13) 年の戸籍調整以前の生まれであるが、童名としてよく見られる「松」に「一」、「三郎」、「吉」、「助」などを加えた〈なまえ〉としている。こうした琉和折衷的な〈なまえ〉は琉球国期の名簿資料には存在しない。
- 21) 例えば、『私の戦後史』第1集～第9集 沖縄タイムス社 1980～1986には合計90名の寄稿が掲載されており、うち84名がそれぞれの生年月日 (1888 (明治21) 年～1923 (大正12) 年)、父母の名を記している。ここから1888年～1923年当時の男女名168名分を得ることができる。興味深いのは女性の〈なまえ〉で、84名中、圧倒的多数の81名が童名であり、ヤマト名は鶴子 (1908ごろ)、清子 (1909ごろ)、芳子 (1917ごろ) 3名のみである。
- 22) 戸主は原則的には男子であったが、女子の家督相続、庶子・私生児による一家創出などの場合には女性戸主もありえた。
- 23) 修身、公民、教育担当教員

- 24) 国語、漢文担当教員
- 25) 第2回（1905（明治38）年）卒業生。国語、漢文担当教員。
- 26) 第20回（1923（大正12）年）卒業生。国語、漢文担当教員。
- 27) 『ひめゆり—女師—高女沿革史—』 財団法人 沖縄県女師・一高女同窓会1987 p.698
- 28) 「現住所及勤務先」欄の「不明」者は全卒業回合計で65名（うち沖縄出身者36名、ヤマト出身者29名）。
- 29) 「故会員」は全卒業回合計で、247名（うち沖縄出身者名195名、ヤマト出身者52名）。
- 30) 比嘉春潮「沖縄人の姓について」1961 『比嘉春潮全集 第三巻』 沖縄タイムス社 1971 p.228
- 31) 「附録 旧職員・現職員・卒業生氏名及住所」『創立二十五年記念』 東京府第一高等女学校校友会 鷗友会編 1913
- 32) 石垣島登野城出身の教育者。戦後初の女性市会議員。生活者としての自身の目を通した民俗誌、『八重山生活誌』1972（第一回伊波普猷賞（1973）受賞）で知られる。その民俗誌において、自身の改名をかなり詳細に述べている点は興味深い。
- 33) 『私の戦後史』第3集 1980 沖縄タイムス社 p.287 および『八重山生活誌』1972 城山印刷 p.296。
- 34) 先に述べたように、琉球藩廃絶、沖縄県設置の翌年1880（明治13）年には、早くも明治政府による戸籍調製が行われている。
- 35) 「言語風俗ヲシテ本州ト同一ナラシムルハ当縣施政上ノ最モ急務ニシテ、其方因ヨリ教育ニ外ナラス。」初代沖縄県令鍋島直彬の1879（明治12）年12月12日付「沖縄縣ヨリ大蔵省へ上申」(『沖縄県史 第12巻 資料編2 沖縄関係各省公文書1』 琉球民政府 1966 p.410)
- 36) 安里彦紀『沖縄の近代教育』 亜紀書房 1973
- 37) 近藤健一郎「学校が「大和屋」と呼ばれた頃—琉球処分直後の学校—」『近代沖縄における教育と国民統合』 北海道大学出版会 2006
- 38) 行商等に必要とされる計算術や「カイダーディー」や「スーチューマー」といった独自の記号、符丁が生み出され、それが口承伝授された。
- 39) 近藤健一郎「学校が「大和屋」と呼ばれた頃」 p.199
- 40) 琉球国においては、士、王族の子女であっても識字等の基礎的な教育から遠ざけられた存在であったとするのが一般的な見方である。事実、

- 王妃を含む王族の女子にも識字能力をもたない者が少なくなかったといわれる。しかし、沖縄県尋常師範学校女子講習科第二回入学生であり、のち県立高女教員となった武富節子（ツル）の以下の語りからは、琉球国における女子に対する家内教育の異なる一側面が見える。「父はおとなしい人でした。しかし、子供の教育となると、非常に厳格で、儒教尊信者でありました。ですから私は、女ながらも、小さい時分から、論語、孟子などの漢籍を勉強する機会が多かったです。教員講習所に入所するときは、親類縁者みな反対でありました。家庭での漢籍勉強が身にしみ、講習所に入りましても、さいしょの程は、そこで勉強することが、なにかもの足らないような気がしてなりませんでした。」(安里彦紀『沖縄の近代教育』 p.138) とあり、漢学者として王府の禄を喰んでいた父良栄により、一定程度以上の基礎的教育がなされていたことが窺える。また、伊波普猷も自身の曾祖母について「この人はウイトもあり、即興歌もたくみで、また物知りでありました。祖父は記憶力がたしかな人でありましたが、科（今の高等文官試験）を受けてもだめで曾祖母が受験の要諦を教えたほどでありました。」(『沖縄の午後—伊波普猷挨拶』1936（昭和11）年 伊波普猷『沖縄女性史』平凡社 2000 p.123/『伊波普猷全集』第七巻) と述べ、その知性を賞賛しており、琉球国における女子の「知」の実相については慎重に考えるべきであろう。また、後に触れる女学生たちの旺盛な好奇心や、母親たちの教育への高い関心なども、こうした女たちの密やかな知的関心と営為に裏打ちされた存在であったのかも知れない。しかし、武富は「教員講習所に入所するときは、親類縁者みな反対」であったとも語っており、武富の生家のような環境にあっても、女子の家外での教育そのものについては肯定的に捉えられるものでなかったこともまた間違いなかったといえるだろう。
- 41) 勝方＝稲福恵子は尚順男爵六女知名茂子からの聞き取りとして、尚家十九代当主尚泰（最後の琉球王）妃松川按司は、読み書きができなかったことを記している。「読む女・書く女」の出現—口承から書承へ—『沖縄県史 各論編 第八巻 女性史』2016 沖縄県教育委員会 p.147
- 42) 1904（明治37）年の原因不明の火災により校舎全焼、師範学校（男子）とともに首里城内仮校舎へ移転していた。

- 43) 師範学校はその性格上、寄宿舎を必要としたが首里周辺では十分な用地を確保できず、新用地取得のための予算確保が難しかったため、やむなく県立高女敷地内への移転が行われたことが師範学校校長であった古市利三郎によって述べられている。(『姫百合のかをり』 p.122～123)
- 44) 『姫百合のかをり』 p.124、p.146等。
- 45) この「姫百合」の名称は、県女子師範学友会誌「白百合」と県高女校友会誌「おとひめ」を、合わせたもの。
- 46) 1943(昭和18)年、県女師は沖縄師範学校と統合、官立「沖縄師範学校女子部」と改組改称される。
- 47) 『姫百合のかをり』 p.14
- 48) 『姫百合のかをり』 p.428
- 49) 一高女、国語漢文科教員(1933(昭和8)年)
- 50) 『姫百合のかをり』 p.444
- 51) 『姫百合のかをり』 p.98
- 52) 近藤健一郎「〔他府県並み〕への回路としての教育(二) 一日清戦争後における風俗改良」『近代沖縄における教育と国民統合』 p.173
- 53) 首里尋常高等小学校女子補習科は1897(明治30)年設置。
- 54) 「高等女学校の教育は其生徒をして他日中人以上の家に嫁し、賢母良妻たらしめるの素養を為すに在り、故に優美高尚の気風温良貞淑の資性を涵養すると共に、中人以上の生活に必須なる学術技芸を知得せしめんことを要す」『歴代文部大臣式辞集』高等女学校令発布時の文部大臣樺山資紀の同令発布の四ヶ月後1899(明治32)年4月地方長官会議における訓示。
- 55) 小山静子「第一章 良妻賢母思想の成立」『良妻賢母という規範』勁草書房 1991
- 56) 太田朝敷「女子教育と本県」『琉球新報』1900(明治33)年7月5日二面
- 57) 太田良博「第四章 生活・風俗 第三節 交際・風俗 二 風俗改良運動の特色」『沖縄県史』5巻 文化1 沖縄県教育委員会 1975 p.418
- 58) 儀間園子「明治30年代の風俗改良運動について」『史海』No.2 史海同人1985 p.56
- 59) 太田良博「第四章 生活・風俗 第三節 交際・風俗 二 風俗改良運動の特色」 p.418
- 60) 『姫百合のかをり』 p.431
- 61) 小橋川カナ『私の戦後史』第3集 沖縄タイムス社 1983 p.18
- 62) 伊藤るり「女の移動と植民地的近代—沖縄のモダンガール現象への接近」 p.238 『モダンガールと植民地的近代 東アジアにおける帝国・資本・ジェンダー』伊藤るり、坂元ひろ子、タニ・E・バーロウ編 岩波書店 2010
- 63) 伊波普猷「古琉球に於ける女子の位置」『沖縄女性史』平凡社 p.84
- 64) 小橋川カナ『私の戦後史』第3集 p.15
- 65) 島マス『私の戦後史』第3集 p.116
- 66) 野崎文子『私の戦後史』第9集 沖縄タイムス社 1986 p.168
- 67) 小松キヨ(評伝)『なは女性誌証言集 第2集 一戦後50年・生きぬいた女性たち—』1995 那覇女性史編集委員会 p.24
- 68) 深見重子(評伝)『なは女性誌証言集 第2集』 p.11
- 69) 森山(新垣)シズ『私の戦後史』第4集 沖縄タイムス社 1981 p.311
- 70) 『ひめゆり』 p.389には「後世まで根強く遺された女師一高女の伝統とも言うべき高い読書熱」とも記されている。
- 71) 後の伊波普猷夫人 ただし卒業生名簿では「マカト」のままとなっている。
- 72) 真栄田泰山「玉城オト」外間米子監修 琉球新報社編『時代を彩った女たち 近代沖縄女性史』ニライ社 p.114
- 73) 外間によれば、松田晶子(カメ)は、真栄田と同期の高女第12回卒業生とされるが、『同窓会名簿』にはなぜかその名が見当たらない。
- 74) 外間米子「松田晶子」『時代を彩った女たち』 p.105
- 75) 真栄田泰山「玉城オト」『時代を彩った女たち』 p.114
- 76) 『ひめゆり』 p.249
- 77) 『ひめゆり』 p.209
- 78) 『姫百合のかをり』 p.447
- 79) 『姫百合のかをり』 p.64
- 80) 『姫百合のかをり』 p.464
- 81) 金城芳子『なはおんな一代記』沖縄タイムス社 1980 p.128
- 82) 述べたように、沖縄における女子中等教育の最初期においては、沖縄出身者はむしろ少数派であった。師範学校女子講習科第一回生10名中、沖縄出身者は久場ツル1名であったし、私立沖縄高等女学校においても同様で、第一回生比嘉カメによれば「第一回の女学校のクラスは他府県の方が多数で、次に首里の名家の令嬢方で那覇からは備瀬かめさん御一人でいらつしやいました。』『ひめゆり』 p.67という。
- 83) 「表2 卒業整数と沖縄出身者、大和出身者」および「表2-2卒業生数の推移」は『県立一高女

- 同窓会名簿』上のヤマト出身女学生数と沖縄出身女学生数を表化したものである。卒業生9名の第1回、第2回はおくとしても、第3回(1906(明治37)年)以降第21回1924(大正14)年)までは20～30%、第22回から第24回(1927(昭和2)年)までは15%前後、第27回(1930(昭和5)年)以降は10%以下と減少傾向にはあったものの、一定数が在籍していたことがわかる。
- 84) 『ひめゆり』 p.67
- 85) 『なはおんな一代記』 p.133 p.138
- 86) 本稿では以下、金城の与儀についての語りに現れる「モダン」という語を、「ヤマトの、東京の最新文化」という意味合いを込めて用いることとする。
- 87) 『なはおんな一代記』 p.113
- 88) 伊藤るり「女の移動と植民地的近代」 p.236
- 89) 伊藤るり「モダンガール現象と女たちの新しい卓越感覚」『沖縄県史 各論編 第八巻 女性史』 2016 沖縄県教育委員会
- 90) 伊藤るり「日清戦争での清の敗北で、清の支援を受ける道を断たれて以降、沖縄では雪崩を打つように大和化が行われたとされるが、この大和への同化において、女学生たちは完全な受け身であったわけではなく、「大和」の内的差異と力関係を利用しながら、大和化のあり方について駆け引きを行なった。彼女たちは、学校の中で培われた個人という感覚に基づき、また新たに生み出された「沖縄人」アイデンティティに基づきつつ、女学生文化のなかの卓越をめぐる競争に参入した。」伊藤るり「モダンガール現象と女たちの新しい卓越感覚」 p.179
- 91) 伊藤るり「モダンガール現象と女たちの新しい卓越感覚」 p.179
- 92) 富永：第2回卒業生、真栄田：第12回卒業生、玉城：第9回卒業生、金城：第15回卒業生、新垣：第16回卒業生
- 93) 『姫百合のかをり』 p.113～114
- 94) 「この頃は廃藩置県を去ること僅かに十五年で、士族の職を失う者が甚だ多く、したがって女子の活動の最も盛んな時代であった。そして男子がヤケ酒を飲んでいる間に、無学なる那覇夫人がつとに新時代の到来を直覚して、その子供を学校におくって、新教育を受けさせたのは、特筆大書すべきことである。今日那覇の先輩といわれる名士はおおかた母の手一つで育てられたといっても差支えないくらいである。」伊波普猷「古琉球に於ける女子の位地」『沖縄女性史』 1919 (『沖縄女性史』 平凡社 p.67)
- 95) 比嘉政夫「沖縄社会の民俗的特質」『女性優位と男系原理 沖縄の民俗社会構造』 凱風社 1987
- 96) 勝方＝稲嶺恵子「『読む女・書く女』の出現—口承から書承へ—」『沖縄県史 各論編 第八巻 女性史』 2016 沖縄県教育委員会 p.148～149
- 97) 勝方＝稲嶺「『読む女・書く女』の出現」 p.145
- 98) 『私の戦後史』第3集 p.287 (『八重山生活誌』 1972 城山印刷 p.296)
- 99) 『ひめゆり』 p.131)
- 100) 『時代を彩った女たち』 p.81
- 101) 千原繁子『私の戦後史』第2集 1980 沖縄タイムス社 p.214
- 102) 『なはをんな一代記』 p.7～8
- 103) 伊江朝真(琉球王家、尚家分家の伊江御殿十三世、男爵)、マカトの次女、県立高女第20回(1923(大正12)年)卒業
- 104) 上地恵美子『なは女性誌証言集—生命のあかし—』 1994 那覇女性史編集委員会 p.63
- 105) 宮城の語りに登場する同郷の友人、新嘉喜(許田)操は、宮城や豊川より二級上の第6回(1909(明治42)年)卒業生であり、『同窓会名簿』には旧姓名として新嘉喜マツルを載せている。したがって改名は卒業後と推定される。ちなみに新嘉喜は卒業後、県立高女教員となっている。
- 106) 『なは女性誌証言集 第2号—戦後50年・生きぬいた女性たち—』 1995 那覇女性史編集委員会 p.11
- 107) 『ひめゆり』 p.258
- 108) 『やんばる女一代記 宮里悦自伝』 1987 沖縄タイムス社 p.10
- 109) 「セーラー服」琉球新報社会部『昭和の沖縄』 1986(昭和61)年 ニライ社 p.49
- 110) 『ひめゆり』 p.457
- 111) 『姫百合のかをり』 p.414
- 112) 川平朝令(かびらちょうれい) 1888(明治21)年～1964(昭和39)年。東京高等師範卒。1919(大正8)年より件女師・県立高女教諭。1927(昭和2)年～1941(昭和16)年両校校長。
- 113) 『大阪朝日新聞』1935(昭和10)年7月18日「“なべ”を花子に一統々と内地化 沖縄の珍名改称」(那覇市歴史博物館蔵)には、この年県下中小校長会において改名が議論されたことが伺える記載がある。ただし記事自体が断片化しており、その詳しい内容等については不明。
- 114) ヤマト人にとって難読の沖縄固有姓についての読み換え案。「法」とあるが「法律」ではなく、「方法」を指す。『沖縄教育』昭和12年3月号(247

号) および、『日報の沖縄人名録』附録 琉球日報社 1937において発表されている。

- 115) 『沖縄毎日』1913 (大正2) 年5月1日 (『沖縄県史 資料編25 女性史新聞資料 大正・昭和戦前編 女性史2』 2015 沖縄県教育委員会)
- 116) これらの「差別への身構え」、「生活上の利便性」等が改名や改姓の理由づけとして語られることは多いが、これらも結局のところ、差別者、多数者の側の利便に過ぎないということには注意しておくべきだろう。
- 117) 『時代を彩った女たち』 p.81
- 118) 大宜味とみ (『ひめゆり』p.484)、徳田れん (『ひめゆり』 p.526) は映画の禁止について述べているし、上江洲トシは「女子師範時代は五カ年寮生活であったが、全くの籠の鳥であった。昭和に入ると、大正デモクラシーは大きく後退し、昭和三年には、男女合同の学生会は絶対禁止。映画を見るのも、年一、二回の団体見学だけで、映画館は常時、教育連盟の先生方が監視してい

た。路上では同郷の人に合(ママ)っても、横目で見ただけで会釈さえしなかった。』『私の戦後史』第9集p.290と述べている。

- 119) 勝方=稲嶺恵子「『読む女・書く女』の出現 一口承から書承へー」
- 120) 伊藤るり「モダンガール現象と女たちの新しい卓越感覚」 p.179
- 121) 鹿野政直「『沖縄』と『琉球』の狭間で」 p.11
- 122) 波平恒男「教育の普及と同化の論理」
- 123) 正確には「合格候補者」。記事の末尾には「四月五日午前十時ヨリ当校ニ於テ身体検査施行ノ上合格ヲ決定ス」とある。
- 124) 西原諄「戸籍法制の変遷と問題点」宮里政玄編『戦後沖縄の政治と法』 1975 東京大学出版会

2021年9月28日 受付

2021年12月2日 採択決定